

市民の意見

発行：市民の意見30の会・東京

NO.128

2011/10/1

【毎月1日発行】



発行者の住所：〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-29-12-305 TEL:03-3423-0185 FAX:03-3402-3218
 郵便振替：00120-9-359506 eメール：iken30@mwb.biglobe.ne.jp ホームページ：http://www1.jca.apc.org/iken30
 *隔月刊/購読料・送料とも年2500円、一部400円、65歳以上および身障者の方は年2000円、グリーン会員の方は年1000円



須原忠雄「柑橋實る頃」

(無言館所蔵)

作者経歴



須原 忠雄

(すはら・ただお)

1916年(大正5)静岡県に生まれる。1946年(昭和21)1月10日シベリアにて戦病死。享年29歳。

(窪島誠一郎「無言館の青春」講談社刊より)

市民の意見 128号 目次

●巻頭詩 「危険物理蔵地」

福田万里子 2

●特集1 東日本大震災と自衛隊

自衛隊を災害救助隊へ

新倉裕史 4

講演・トモダチ作戦とは何だったのか

半田 滋 7

●特集2 福島原発人災事故

20ミリシーベルト撤回と

満田夏花 10

「避難の権利」確立に向けた運動

大沼安史 12

世界が報じる福島原発災害

諸橋泰樹 15

●反戦・反基地

66年目の広島と長崎を訪れて

北原博子 22

●運動の現場から

9・11 人間の鎖

白田敦伸 23

「ぶつ通しデモ」の50日

吉田和雄 25

基地も原発もない平和を

垣内成子 20

8・15アクション報告

鈴木一誌 19

●文化

いま、改めて「民族」を問う

脱原発のエッセイ25 映画を観ていたころ

映画の紹介 失われた世界への愛惜

「カーリーナの林檎」チエルノブイリの森」

「ナージャの村」

本野義雄 26

本の紹介「沖繩 アリは象に挑む」

村雲 司 27

脱原発の書籍数点のご紹介

マンガ ふしぎの国のありか

吉川勇一 28

まっただたえこ

30

●情報

読者懇談会報告 18

インフォメーション

新事務局体制のお知らせ

野澤信一 31

事務局だより

高橋武智 35

読者のおたより

32

◆題字 安西賢誠 ◆カット 村雲 司

会計報告・編集後記

36

33

34

35

☆10月の読者懇談会のご案内☆

・テーマ【2011年3・11から8・6、8・9へ】諸橋泰樹さんのお話(本誌P15論文参照)

日時：10月21日(金)午後6時半 参加費：500円 場所：ピープルズ・プラン研究所(東京都文京区関口1-44-3 信生堂ビル2F 地下鉄有楽町線江戸川橋「1-b」出口徒歩5分 P14地図参照 電話03-6424-5748)

危険物理蔵地

福田 万里子

原発事故がかすめた地域では

木いちごの実が摘めません

ジャムも作れないし

いま眼の前で跳びはねている

鳥やけものたちはすべて殺さなければなりません

それらはまともな暗い穴の中に埋められます

危険物理蔵地——なんとウソさむい表示

地獄草子にもなかったことだ

春の花野の生命の場所が

いつせいに血を吹いて死に絶え

死んだばかりか怨念の復讐をつづけるのです

危険物理蔵地

もう森にははいれません

野あそびでここを洗うこともできません

セシウムの花が咲く風の方におびえ

行ったものは帰れません

■ 詩の作者 ■

ふくだ・まりこ

1933年、東京都に生れる。佐賀県で育ち、大阪府枚方市に長く暮らした。詩誌「アルメ」「楽市」、詩集「柿若葉のころ」「福田万里子全詩集」。エッセイ集「花ばなの譜」。「原爆詩181人集」の表紙画を描いた日本画家でもあった。2006年逝去。

イラスト：村雲 司

行って帰ってこれないなんて

そんな馬鹿げたことを性こりもなく

にんげんがしているなんて

神さまにどうやって説明するの？

小さな女の子の眼がそういつています

ほんとうに

なんと説明するのでしょうかねえ

感動とは

昔を記憶によみがえらせて

生命をつなぐことではなかったか

「五歳の子供がニュースを聴く。六歳はデモをし

七歳は砂、車、花（の汚染）を心配する」と西ドイツ

ツの週刊誌「シュテルン」は伝えている（※）

小さな子供たちの小さな胸は

ほんの少しの幸福で一杯になるはずなのに

森や公園のかくし絵のような愉しきは皆無で

危険物理蔵地——

激しくみえてくる表示の予感を

暗く波動させているばかりです

きょうの風はどこから吹いてくるのだろうか

もうお話は生まれません

（原爆詩「二人集」（2007年8月株式会社サック社刊より転載）



電

※高木仁三郎「チェルノブイリ・最後の警告」より

特集1 東日本大震災 と 自衛隊

東日本大震災による自衛隊の活動は災害後の救援に大きな力となりました。軍事組織である自衛隊の位置づけを、今後わたしたちはどのように考え、そしてどのような方向性をもって運動を展開していったらよいのでしょうか。

軍事組織から非軍事組織への転換——。未曾有の大災害において果たした自衛隊の役割をもう一度見つめなおし、評価する過程を通して、今後、わたしたちがとるべき道筋を大いに議論していくことが求められています。

自衛隊を災害救助隊へ

●月例デモで

横須賀の月例デモは、毎月、自衛官、米軍兵士に直接語りかける。東日本大震災後の3月27日の月例デモで、震災と援助活動について兵士たちにどのような言葉を伝えるべきか、私たちは話し合った。7月9日の学習会での市川平さんの主催者挨拶が、私たちの話し合いの中身を良く伝えていたので引用する。

「震災で米軍や自衛隊が救援活動を行ったことに対して、私自身が見たり聞いたりして、これまでのように批判、抗議といったことだけではすまないと思いました。

目の前で救助を待っている人たちがいる訳です。その人たちに彼らが救助の手をさしのべることができるか、軍隊だからという言い方で批判できるのか。救助は救助として評価する。救助してくれたことには感謝する。まずそうあるべきだと思いました。反対運動をできなかったものにとって、気持ちの整理ができないことではあるんですが、それでもやはり、まず感謝があるべきだと思う。その上で、私たちがどう対処するか、どう考えていくかと進まない限りは、現実に救助された人たちの気持ち

とどこかずれていくのではないか。

米軍や自衛隊の本質は本質として、また実際に行ったことの問題点の指摘はもちろん必要ですが、まず感謝をする、という行為を経ることによって、次に見えてくるものを考えていきたい。」

新倉 裕史

▼総監部前で自衛官への訴え (2011.3 月例デモ)



●自衛隊災害出動の評価をめぐって

岩波新書「大震災のなかで 私たちは何をすべきか」の「序のことば」で、編者の内橋克人さんは、「現地で懸命に救助活動にあたる警察、消防、行政の人びともまた被災者である。介護にあたる医師、看護師たちの献身と善意だけが限度ギリギリの生命の危機を支えた」と書いています。

10万人以上が動員され、救助活動に大きな力を発揮している自衛官がここには含まれていない。3月28日の読売新聞によれば、救援



山形空港に着陸する米軍機 C130 輸送機

活動に従事している航空自衛隊松島基地では、隊員2名が死亡し、1名が行方不明。陸海空合わせて、隊員の家族の死者は約160人。自衛官もまた被災者であるはずなのに。

一方で、自衛隊の出動を有事対応

の文脈で捉え、「役に立つアピール」「有事の際の訓練」と批判する意見がある。今回の災害出動を有事対応の文脈で捕らえることの必要性には基本的に同意する。しかし、そこだけに立ち止まっていけないのか。

●山形空港の米軍使用で何があったか

救助活動と有事対応については報告したいことは多くあるが、限られた字数なので、米軍の山形空港の使用についてのみ触れる。

米軍が緊急着陸時などを除いて日本国内の民間空港を使うのは「初めてのケース」(防衛省幹部)だ。(読売、3/19)

民間空港・港湾の米軍使用に踏み込んだ。実体は「有事対応シミュレーション」といえた。(毎日新聞、4/22)

しかし、これらは事実と反する。2000年4月24日、米陸軍の小型ジェット機が、帯広空港に強硬着陸したことがある。緊急着陸ではなく、陸自第5師団の研修に参加する将兵を降ろすためだった。帯広市は抗議し、帰路も軍用機で帯広空港から帰るとしていた米軍に対し、空港管理権を根拠にがんばって、計画を断念させた。だから、初めてではない。そして、帯広空港がそうだったように、山形空港の米軍使用に関しても、管理者である山形県の抵抗があった。

米軍は山形空港の使用を希望したが、山形県は政府の判断を求め、一時、難色を示した。北沢防衛相が直接吉村美栄子知事に電話をし、許可を取り付けた。(神奈川、6/15)

かつてない大災害のなかでも、空港の軍事使用に難色を示し得た山形県知事の空港管理者としての振る舞いに拍手をおくるべきではないか。そのうえで、おそらく事態の深刻さにかんがみ、空港使用を認めた流れを、私たちは支持したい。米軍機は許可を得て山形空港を使った。この事実を見のがしてはならない。

●自衛官の気持ちにそって

自衛隊を災害救助隊へという議論は、そう言うしかないという言い方ではなくて、むしろこの事態を転機に、自衛官の圧倒的な経験に沿って、自衛隊は何のために存在するのかということ、一から問い直す議論でもある。

地震はこれからも繰り返す。そうした場所に我々は暮らしている。であれば、国家レベルで災害救助組織はやはり必要ではないか。

国家レベルの救援組織を考えたとき、自衛隊が一番近い所にいることは今回の出動を見れば明らかだ。消防救援隊も、自治体消防も、警察も、必死に頑張ったが、被害の広域化に対応するには限界があった。

東京新聞は3月28日の社説で、「災害派遣

をより本格的に」と書いた。「この際、確度が高い災害派遣にいつその力を入れることにしてはどうか。昨年12月に閣議決定された「防衛計画の大綱」は、「本格的侵攻の可能性は低い」とし、戦車、大砲といった冷戦型の装備を大幅に減らす一方で、陸上自衛官の編成定数は15万4000人と10000人の削減にとどめた。普通科(歩兵)が増えるであろう陸自に各種災害に備えた専門部門を新設するのは難しくない。」

社説は「国防と災害派遣、二正面での活躍を期待したい」と結ぶが、軍事的な脅威の低下という事実を背景に、自衛隊の任務を災害対策へシフトしていくという議論は、そんなに唐突な議論ではないことが、ここに示されていると思う。

●自衛隊がかかえたシレンマ

軍隊としての自衛隊を確立すべきと考える人たちは、自衛隊が災害出動によって評価されたことが、自衛隊の支持基盤を形作ることに強い警戒心を持っているように見える。

たとえば元自衛官である佐藤正久議員。緊急出版した新書の中で、自衛隊が災害救助隊を目的とする組織に変わったなら、今回のような力を発揮できないと力説する。

自衛隊は「国を守る」ことが本来の任務です。そのために厳しい訓練や演習を日々、行っています。だからこそ、その応用で災害時の

救援活動、支援活動に最大の力を発揮できるわけで、災害救助を最大の目標としてしまつたら、それだけ訓練の内容もグレードダウンするでしょうし、結果として今回のような活躍はできなくなってしまうと思います。(「ありがとう自衛隊」佐藤正久)



実際はどうか。自衛隊は2万人近い人を救い出したが、動員数で割れば5・5人でひとりを出した計算になる。一方、消防救助隊は1・3人で、地元の仙台消防局は0・35人でひとりを出している。佐藤議員の指摘が正しければ、「救助を最大の目標」とした消防救助隊や地域消防局が自衛隊を上回る実績をあげることができないはずだ。しかし現実には「救助を最大の目標」とし、そのための訓練を日々重ねている組織だからこそ、自衛隊を上回る実績をあげることができた。

佐藤議員は、「いつそのこと自衛隊は災害救助部隊にしてしまったほうがいいのでは？」(同上)という声がかかることを警戒し

ている。その声が、軍事力の削減を伴ってしまふことに強い危機感を抱いている。そのために、こうした声を無力化するために先手を打っている。

だからこそ、10万の自衛官が、かつてない規模の救援活動に従事し、力を発揮し、そして多くの被災者から感謝された、この経験を大事にしたい。過酷な任務の中で、日々命の尊さを実感しているだろう自衛官が、災害救助と本務である戦闘行動の違いに何かを感じた時、私たちの言葉は、案外近くまで届くのではないだろうか。

●専守防衛とセットで

救助隊へのシフトが非現実的というのなら、せめて今回の経験が、自衛隊が海外に展開する軍隊への脱皮を加速させるのではなく、ブレーキとなるよう「再定義」する努力は、平和運動の重要な仕事ではないのか。その努力がないまま、自衛隊の出動をただ批判するだけでは、社会運動としての信頼は得られないのではないか。

自衛隊の災害救助隊へのシフトは、徹底した専守防衛化を伴うことは言うまでもない。論の進め方のイメージを言葉にすれば、「自衛隊が9条に帰る道→災害救助隊」だろうか。(にいくら・ひろし、非核市民宣言運動・ヨコスカ/ヨコスカ平和船団)

講演・トモダチ作戦とは何だったのか

―米国に自衛隊とカネを差し出す日本

半田 滋

8月30日、小金井市上之原会館で、軍隊は「トモダチ」か?! 米軍・自衛隊による「災害救援」を検証する。集会（主催は同実行委員会2011）が開かれた。9月1日は「防災の日」とされているが、今年10月29日、東京都・小平市・西東京市・小金井市の「合同防災訓練」に警察・消防はもとより、自衛隊と米軍も参加、国家中枢を守る名目で、環状7号から内側を封鎖し、事実上、首都戒厳状態を現出するような計画が進行中で、これに抗議する趣旨の集会だった。席上、「東京新聞」の論説兼編集委員の半田滋さんが標記のような講演をおこなった。半田さんと主催団体の許可を得て、以下に講演要旨を掲載する。（文責、本誌編集委員・高橋武智）

3月11日も防衛省で仕事をしていた。記者クラブの隣の部屋で広報官と話している最中にグラツと来て、テレビで見た津波の状況からも、阪神淡路大震災よりひどいという実感があつた。

今多くの国民がトモダチ作戦について、「自衛隊ありがとう」「米軍サンキュー」という感じをもっているのは事実だろうが、この点をあまり過大評価してはいけない。今日は、なぜ過大評価すべきでないかをお話したい。

普天間基地から第三海兵遠征隊が来たが、海兵隊は犯罪や交通事故を引き起こし、沖縄では嫌われ者だ。大震災の救援活動をつづける一方で、海兵隊は普天間の移転先とされる名護のキャンプ・シュワブに、今までの有刺鉄線に代え住民を拒絶するようなコンクリー

ト・フェンスをつくりつづけた。だれが浜辺から基地に入るといふのか。これが「よき隣人である」と主張する米軍の本音である。

私たちは沖縄に米軍基地の負担を押しつけ、安心・安全だけを享受してよいのか。それはちやうど、福島に原発の負担を押しつけ、電力を享受してきた東京と瓜二つの構造ではないか。大震災の復興資金が不足すれば、普天間基地は膠着化し、さらなる基地負担を沖縄に押しつけることになる。日米安保とは何なのか、大震災の実例から不適切な日米関係が見えてくるはずだ。

自衛隊は「頼りになる」という空気が広がりつつあるが、自衛隊法に定められた災害派遣（83条）、地震防災派遣（83条の2）、原子力災害派遣（83条の3）などの本来任務を淡々

2011.4.10 宮城県石巻市 ©Sgt. Derek Kuhn



とおこなったにすぎない。たとえば、福島第一原発に出勤した隊員には4万2000円の出勤手当が認められるが、警察・消防は5500円である。本来任務でも多額の手当がもらえるとわけて、高卒段階で二年間、自衛隊に勤務できる。衣食住つきで、手当てももらえるのでやめられなくなり、世界一高齢化した軍隊になりつつある。

作戦の経過

仙台空港には、嘉手納から米空軍の第353特殊部隊がパラシュート降下――沖縄では、県と地元三市町の反対を押し切って、

基地内で降下訓練を強行、女児2人の犠牲を含め、事故は44件あった。5月にも訓練を強行している——し、状況を偵察したのち、一般の報道によれば、海兵隊が来たといわれている。特殊部隊が来たのは確かだが、実は軍用機が降りられるように滑走路を修理したのは日本のゼネコンであった。

13日には原子力空母レーガンが仙台沖に出動、それを守るために横須賀から第七艦隊の補助艦艇が出て合流した。

佐世保には強襲揚陸艦がいるのだが、震災当時、ASEAN地域フォーラムで東南アジアに行っていた。それを中断してもどつてき



2011.4.3 宮城県気仙沼市大島 住民とともに机を運ぶ米海兵隊員
©Official Marine Corps Photo by Lance Cpl. Garry J. Welch

たが、福島沖——米国は原発から50マイル、80キロ遠ざかる方針だった——を避けて、日本海経由で東北沿岸にきた。

これら沖合の艦艇からは、ヘリコプターで被災地や松島湾の大島などに物資を運んだ。それをPRするために、岩手で自衛隊とともに、高校の瓦礫処理をした。せっかく来たのだから、出番がなければいけないというわけで、これをマスコミに発表することで、実際より過大な評価を受けた。本当は自衛隊のほうがよくやったのに……。

トモダチ作戦をめぐる米国の三つの狙い

第一に、日本と周辺有事の予行演習という性格があった。1997年の日米ガイドラインなどにもかかわらず、日本とその周辺はあまりにも平穏だったが、今回の震災により、戦争にも匹敵するような事態が起こった。これは米国にとって絶好のチャンスだったろう。

在日米軍は太平洋軍の指揮下であり、これは西太平洋とアジア全体の陸（第一軍団はキャンプ座間）・海（第七艦隊）・空（海兵隊（在沖繩）・陸軍の特殊部隊を統括している。今度の作戦にあたっては、太平洋艦隊司令官・ウォルシュ大将が幕僚200名を連れて横田に来て統合支援部隊を立ち上げた。共同調整所が防衛省と横田基地と仙台駐屯地に設置された。

このようにしてはじめて、日米が有事に対応する体制ができたことになる。

第二に、「クリーンな原発で行く」という

オバマは、核兵器なき世界をぶちあげた。ところがわずか一年後に原発事故が起こってしまった。当然米兵や米国民を放射能から守らなければならぬわけだ。メアによれば「50マイル離れる」という基準だったが、東京に米国人が多すぎて、「避難」でなく「退避」となったという。事実、沖繩の第三海兵遠征軍のうち、7500人は退避したし、横須賀を母港とするジョージ・ワシントンも佐世保に退避した。

第三に、米国のアジア太平洋戦略を維持せよという至上命令が堅持されている。米国の「日本を経済大国の地位から転落させない」という政策と、「自衛隊による米国支援は不可欠」という軍事的必要性とは、裏表の関係にあるととらえるべきだろう。

ブッシュの時代から、周辺国の利用政策が始まったが、中国包囲網に日本を加えたいというのが、米国の大きな狙いだ。これは日本に、オーストラリア・インド・シンガポールなどの米国の友好国ともよい関係をもたせようとする政策にも通じる。

米国はもはや「世界の警察官」ではない。とくにオバマは、経済の面で中国との接近をはかっている。できれば、安全保障の面でも接近したいだろう。その代わり、中国に槍を突きつけるような役割は日本に演じさせたいのだ。目立たないような肩代わり——いかなれば日本は、「いちばんいいことを聞いてくれる可愛い存在」にしたい、というのが米国

の本音であろう。

役に立たなかった大型艦

これらの理由から、「トモダチ作戦」が演じられたと考えられる。

阪神淡路大震災のときとの相違を一言すると、何といっても自然的な条件が異なった。被害が一つの都会に限られたから、1万人だけの派遣だったが、今度は東北地方一帯であり、自衛隊だけで10万人を超える派遣になった。それに、東北自動車道が通行できた好運もあり、さらに、自治体から自衛隊への出動要請も早くできるようになったことも手伝った。

一方へり空母型護衛艦「ひゅうが」は海自最大の艦艇だが、大震災当日定期修理中で、まったく役に立たなかった。

「おおすみ」型の輸送艦には、100名くらいのオペレーションルームがあり、災害時の自治体の対策本部に使われる予定だったが、イザという場合には、どの自治体も地元にとどまり、全然利用されなかった。

吃水が深い艦船は、ガレキで座礁してしまい、役に立たず。水深の浅い船——たとえば、ホーヴァークラフトのようなもの——が小回りがきいた。

ところで、トモダチ作戦への米予算の総額は、たった8000万ドル（円の現勢でいうと、約60億円）だった。

他方、ドサクサにまぎれ、4月1日から思いやり予算が増大した。これまでは、日本人従業員の労務費などだけだったのが、基地を直す費用（提供施設整備費）まで支払うようになった。

6月22日の2プラス2での合意事項

米国防長官は6月30日に辞任、昔も辞意を表明していたし、米国はやりたくなかったのに「2プラス2」——両国の外相と国防相クラスの会談——を開いた。トモダチ作戦が成功した今をはずすとできませんよ、という考え方からだろう。

作戦を「二国間の訓練・演習・計画の成果」と手放して評価しただけでなく、普天間の辺野古移転も承認した。

いちばん重要だったのは、今後の日米軍事協力のあり方だろう。「アジア太平洋の平和と安定」「航行の自由」「宇宙・サイバー空間の保護」など、もっともらしい言葉が並ぶが、いずれも対中国戦略を頭に置いた表現であった。

南西諸島への自衛隊の展開や、「中期防」で米軍支援を決めているのは、これに呼应した動きだ。

一言でいえば、長年の積み重ねがあったからこそ、作戦は成功した。今後も米国が日本周辺で戦争するとき、助けましょう、ということである。

よりグローバルに展開する自衛隊へ

集団的自衛権を認めよというアーミテージ報告が出てからすでに久しいが、9・11後の洋上給油やイラク派兵が実現した。名古屋高裁の判決は一定の歯止めになるかもしれないが、今や、自衛隊は海外のどこへでも行ける軍隊になっている。

たとえば、海賊対処のため——ほんとうは海上保安庁でも間に合ったのに——自衛隊はソマリアに出動している。ジブチに設けた基地には、P3C哨戒機を配備している。ドイツやスペインも哨戒機をもっているが、常に出動させてはいないのに、日本は常時二機を配備している。

パレーンでの米英日の機雷除去合同訓練などまで常態化することで、だれも疑いをもたなくなっているのは大変なことだ。そのなかでのトモダチ作戦だったという意味を考えなければならぬ。

（はんだ・しげる、『東京新聞』論説兼編集委員）





外部被ばくの積算線量
(3月12日6:00から4月24日0:00
までのSPEEDIによる試算値)

外部被ばくによる実効線量
日時 = 2011/03/12 06:00 - 2011/04/24 00:00 の積算値

積域 = 92km X 92km
核種名 = I-131, I-132, Cs-137, Cs-134
対象年齢 = 成人

【凡例】
実効線量等値線 (mSv)

| | |
|---------|-------|
| 1 = 100 | ----- |
| 2 = 50 | ----- |
| 3 = 10 | ----- |
| 4 = 5 | ----- |
| 5 = 1 | ----- |

← 屋内退避レベル

文科省ホームページより

20ミリシーベルト撤回と「避難の権利」確立に向けた運動

満田 夏花



5月23日の午後、小雨がときどきぱらつく中、文部科学省の東館前は異様な熱気に包まれました。福島からバス2台を連ねてやってきた70名の父母たちとそれを支援する市民団体、かけつけてくれた国会議員たち。あくまで20ミリシーベルトの撤回を求める父母たちに対して、言を左右にする渡辺格・文部科学省科学技術・学術政策局長。文部科学省の旧館は、全国から参加した市民による人間の鎖によって取り囲まれました。

交渉を主催したのは、子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク、福島老朽原発を考える会（フクロウの会）、FOE Japan、美浜の会、グリーン・アクション、グリーンピース・ジャパンの6団体。

2時間以上行われた交渉において、高木義明文部科学大臣や、笹木竜三、鈴木寛副大臣、笠浩史政務官、林久美子政務官が姿を現すこととはついにありませんでした。

4日後の5月27日、文部科学省は、「学校内で年1ミリシーベルトを目指す」という内容の通知を发出。大きな課題を残しつつも、文科省前の要請行動は、一定の成果を上げました。一方で、この「学校内年1ミリシーベ

ルト」は、学校外はカウントしない、水素爆発のあった3月の被ばくはカウントしない、内部被ばくはカウントしないなど、実際の被ばくとはかけ離れたものとなっています。8月26日文科省は、20ミリシーベルト基準を撤回しましたが、新しい校庭利用基準の毎時1マイクロシーベルトも放射線管理区域（毎時0.6マイクロシーベルト）をはるかに超える値で、問題は解決されていません。

■「年20ミリシーベルト」とは？

発端は、4月19日、文部科学省は、学校等の校舎・校庭等の利用判断における放射線量の目安として、年20ミリシーベルト、校庭において3.8マイクロシーベルト/時という基準を、福島県教育委員会や関係機関に通知したことにあります。このことにより、今まで校庭の利用を控えていた学校側は、3.8マイクロシーベルト/時を安全基準と判断し、子どもたちの屋外の活動制限を解除したので

す。

「年20ミリシーベルト」は避難区域設定の基準にもなっています。しかし、下記に示す通り、「年20ミリシーベルト」は国内法上も、

国際的にみても、非常に高い値です。

法令による公衆の年間の線量限度は1ミリシーベルトである（原子炉等規制法）

放射線管理区域は年5.2ミリシーベルト、放射性管理区域では、労働法規により、18歳未満の労働は禁じられている。放射能マークを掲示し、子どもを含む一般人の立ち入りは禁じられ、厳格な放射線管理が行われ、事前に訓練を受けた者だけが立ち入ることのできる区域である（電離放射線障害防止規則など）

表1 チェルノブイリ原発事故による避難基準

| | 土壌汚染 | 積算線量 |
|-----------------|---------------------------------------|---------------|
| 移住の義務ゾーン | セシウムによる土壌汚染 555キロボクレル/平方メートル以上 | 年5ミリシーベルト以上 |
| 移住の権利ゾーン (※) | セシウムによる土壌汚染 185～555キロボクレル/平方メートル以上 | 年1～5ミリシーベルト以上 |

※「移住の権利ゾーン」の住民は、避難するか、とどまるかを選択することができた。避難する住民には、補償、移転先の住居、医療サポートが提供された。

チェルノブイリ原発の周辺国は、チェルノブイリ原発事故による避難基準について表1のように定めている。原子力発電所等の労働者がガンや白血病で亡くなった場合の労災認定基準は、年5ミリシーベルトから定められている。過去35年で10

人が累積被ばく線量などに基づき労災が認定されており、累積被ばく線量5.2ミリシーベルトで認定された事例もある。
ドイツの原発労働者の被ばく限度は年5ミリシーベルト

このように20ミリシーベルトは一般公衆の被ばく基準としては非常に高い値です。また、妊婦、乳幼児、子どもは、一般の成人にはるかに高い感受性を有しているのに、同様に適用されています。

私たちは、4月以来、この「20ミリシーベルト」撤回に向けて、署名活動、政府交渉や要請行動などを重ね、社会的に「20ミリシーベルト」撤回を求める大きなうねりにしていくことに貢献しました。

「避難の権利」確立に向けて

年20ミリシーベルトは、計画的避難区域などの基準ともなっています。避難区域外であつても、福島県内各地、とりわけ福島市、郡山市、伊達市、二本松市などでは、いまだに年推定数ミリ〜20ミリの高い線量を示しています。この値は内部被ばくを考慮に入れたものではありません。

そんな中、子どもたちを抱えたお父さん、お母さん方は、子どもたちを守るために、真剣に避難を考えています。一方で、区域外避難に関しては、賠償の方針が定まっておらず、仮払いもされていません。たくさんのお父さん、お母さんが、経済的な理由から、また仕事上の理由から避難をできずにいます。

この実情を踏まえ、「避難の権利」確立のため、表2の活動を行ってきました。

表2 「避難の権利」確立のための活動

| | |
|-------|---|
| 7月14日 | 避難者・避難を考えている人の声を原子力損害賠償紛争審査会に提出 |
| 7月15日 | 原子力損害賠償紛争審査会の事務局との交渉～「自主避難者への賠償を」要望書を提出 |
| 7月15日 | 自主避難者による記者会見 |
| 7月25日 | 「避難の権利」アンケート結果発表（272人を対象） |
| 7月29日 | 原子力損害賠償紛争審査会に対する要請行動 |
| 7月～8月 | 「避難の権利」集会の開催（福島で2回、郡山で1回） 東京電力に対する請求運動 |
| 8月12日 | 東京電力に自主避難者、避難希望者の請求書を提出予定 |

活動を通じて、自主避難をしているお父さん、お母さん方の声を政府や東京電力に届け、賠償の必要性、選択的避難区域の設定や、サテライト疎開（＝住民票を福島に残した形でのコミュニティごとの一時的な避難）について訴えてきました。そのかきがあつて、先般、原子力損害賠償紛争審査会において、自主避難にも賠償を前提として、議論が継続されていくことが確認されました。

「政府交渉の継続

さらに、政府交渉も継続的に行っています。6月30日には、避難区域の設定に関する問

重点を、原子力災害対策本部に示し、「避難の権利」区域の設定を求めました。

7月19日には、はじめて福島で原子力災害対策本部との政府交渉を行い、多くの県民の方々にご参加いただき、「子どもの被ばく低減のため、選択的避難（住民が自らの判断に基づき避難を行うことを、正当な賠償の支払いや行政措置などにより保証していくこと）、サテライト疎開（さらに詳しくいえば、学校や支所などを核とする疎開者コミュニティの形成により、福島県人として疎開地で福島人として暮らすこと）を含むあらゆる手だてを」と要請しました。このときのテーマは、①避難区域の設定について、②選択的避難とサテライト疎開について、③子どもたちのトータルな被ばく低減および内部被ばくについて——でした。しかし、残念ながら、対策本部側の回答は、市民側の疑問にきちんと答えたとはいえないものでした。

8月8日には政府とのフォローアップ合見を行い、8月25日には、食品の暫定規制値見直しおよび避難区域設定に関する政府交渉を行いました。

今後は、線量が高い福島市の渡利地区、小倉地区、大波地区などにおいて、住民の方々とともに、行政に対して避難区域の設定を求めるとともに、区域外避難（いわゆる自主避難）の賠償についても粘り強く交渉を続けていく予定です。

（みつた・かなな、国際環境NGO FOE Japan）

世界が報じる福島原発災害

大沼 安史



ミュンヘンで発行されている「南ドイツ新聞」に7月14日、「蚤（ノミ）のサーカスからの撤退（Ausstieg aus dem Fobzhirk）」という短い論評記事が出た。「フクシマ」という史上空前の原発惨事を引き起こしながら、居直り続ける日本の「核権力」を厳しく批判した記事だった。

「蚤のサーカス」とは、ヨーロッパに伝わる「蚤の曲芸団」だ。団長（人間）に仕込まれた蚤たちが、オモチャの大砲を曳いて見せたりする。芸のごほうびに、団長が生き血を飲ませる。それがいまの日本の指導部の姿——。論評記事は、こう指摘する。

「日本では少しでも自分を知られたい者はほとんど、この『蚤のサーカス』に加わる。メディアも、政治に口出しするいわゆる識者らもそうだ。この連中は今、『大連立』の法螺（ほら）を吹いて、それがまるで『革命』であるかのように言っている。彼らは『蚤のサーカス』が観客を失っていることに気づいていないのだ。（脱原発の）市民運動が始まっているというのに……」

「フクシマ」がすでに、「チェルノブイリ」をはじめ、過去に起きた全原子力事故の「合

算放出量」を超えている（米国、「憂慮する科学者たち」のロクバウム博士）のに、この国ではなお、「核権力」原子カムラ」に飼われた蚤たちの支配が続いている。「フクシマ」がすでに「人類史上最大の災害」（英国のクリス・バスビー博士）になっているのに、政治は動かず、マスコミは報じず、蚤たちが相変わらず跳ねまわっている。

これが7月半ば時点での、「脱原発の国・ドイツ」の有力紙、「南ドイツ新聞」の見立てだが、それは「3・11」から半年以上が過ぎた現段階でも言えることだろう。観客が消えつつあるのに、「表舞台」をなお独占している「蚤のサーカス」一座が、舞台からの「撤退」を強いられまいと、居直りを決め込み、「フクシマ」の矮小化に血道をあげている。

「原子炉に飛び込んで死ぬ！」——これはニューヨーク・タイムズやドイツのシュピiegel誌がちゃんと報じた、東電の株主総会での野次だ。「フクシマ」のヒバクシャたちは、徹底除染に動かず、子どもたちを疎開させようともしない日本政府や東電の蚤たちに背立ち、プルトニウムの蚤とり粉をかけて、駆除したい気持ちになっているのではないか。

そして翌日、八月九日のこと——。タイムズに続き、これまた世界的に影響力のある米国のAP通信社が「日本政府、自分の被曝予報を無視 (Japan ignored own radiation forecasts)」と題する特報記事 (APインパクト) を全世界に配信した。

—— 浪江町の馬場町長は12日午後の政府の「10キロ避難」の呼びかけを、なんとテレビで知った。そこで町当局は10キロ圏のすぐ外に位置する、同町苧野地区の苧野小学校を一時避難所のひとつとして住民を避難させた。しかし、事故現場でベント作業の準備が進む中、浪江町民が避難したその苧野小学校こそ、まさに「SPEEDI」が予測していた「放射能雲」の「直撃」先だった！……

ふりかえれば、この「SPEEDI」について、事故4日後の3月15日に「予測不能」とする記事を掲げたのは、読売新聞だった。誰が読売の記者に、この「誤報」を流したのか (書かせたのか)、最早、明らかである。ルモンドは3月26日に早くも、「フ

クシマ」この罪深き沈黙 (Fukushima, silences coupables)」と題する記事を掲げていた。そこに、こんな予言めいた言葉があった。「日本人は……この胸の悪くなるようなドラマの舞台裏に潜む者たちの恐ろしさにますます不安を覚えるようになるだろう」

「核の蚤」どもを天日にさらし天罰を下すべき時が来たようだ。

(おおぬま・やすし、ジャーナリスト)

「世界が見た福島原発災害」海外メディアが報じる真実 (緑風出版、続編が近日中に発刊)。



■10月の読者懇談会のご案内

「2011年3・11から8・6、8・9へ」

本誌編集委員の一人で、15ページ筆者の諸橋泰樹さんを囲んで、ヒロシマ・ナガサキそしてフクシマと続く「核」の問題について考えます。奮ってご参加ください。

お話し 諸橋泰樹さん
日時 10月21日(金)
午後6時30分より
参加費 500円
場所 ビーブルズ・プラン研究所

(左図参照)

ピーブルズ・プラン研究所 住所
東京都文京区関口1-44-3
信生堂ビル2F
☎03-6424-5748



66年目の広島と長崎を訪れて

諸橋 泰樹

■ヒロシマ、ナガサキ、そしてフクシマ

今年8月の「核を考える月間」は、特別な意味があったと言っているだろう。この国はこれまで、1945年8月6日のヒロシマ、8月9日のナガサキ、そして1954年のビキニ環礁での第五福竜丸、3つの被爆・被曝をこうむってきたとされる。そこへ、今年3月以降のフクシマである。

もちろん実際には、1999年に起こった東海村JCO臨海事故のほか、おそらくは全国の原子力発電所地帯で、恒常的ともいえる従業員・地域住民の被曝が生じている。当然だが、「核を考える」のは8月だけの「季節行事」であってならない。しかしそれでもやはりこの8月は、反戦・反核の市民運動にとつてのみならずこの国の人びとにとつてもヒロシマ・ナガサキの苦しみを共にし、意識化する、独特の年になったと思う。

フクシマが今年から「加わった」ことによつて、この国の核問題は新たなステージに入った。

第1に、被爆・被曝が「人ごと」ではないということを感じさせた。地震と津波という

日本にしばしば起こる自然現象によつて、「何重にも安全策をほどこしてある」とうそぶいてきた原子力発電所がいとたやすく炉心溶融し、爆発し、放射能をまき散らしたのだ。周辺住民だけではなく、遠く首都圏の住民に至るまで、自分自身の生死や健康問題、環境や食糧汚染、子どもたちの未来の健康に直接にかかわることを否応なく突きつけた。しかもその影響力は超長期にわたるのである。

第2に、人びとに、「核兵器だけでなく、原発も含めて核はいらない」という意識を醸成した。日本人の多くは、広島・長崎の原爆体験から、核兵器に対する忌避感強い。しかしこと原発となると、地元にあつては利権、電力消費側にとつては利便性、電力会社やメーカー、政治家の利権などによつて組み上げられた国策ということもあつて、「安全と云うならば」という前提で、その場限りの利益に誘導され、思考停止してきた。それが、原発も核兵器も長期にわたつて人を殺傷し、管理しきれないものだということを知つたことで、世論にも大きな影響を与えることになった。

ただし、自民党政調会長石破茂は、原発は

核兵器をつくるのに有用として核の戦略的所
有を主張し（8月16日のテレビ朝日「報道ステーション」発言）、民主党政調会長前原誠司は武器輸出3原則の見直しに言及する（9月8日米国での講演）など、政治家の核兵器や武力の保有論は根強く存在する。彼らは世論で首相候補の呼び声が高い。4月に行われた東京都知事選では核武装論者であることを隠さない石原慎太郎が圧勝したが、世論は実は一貫性のないものにもみえる。

新たなステージの理由として第3に、戦後66年を経て歴史的風化と未来への永劫の伝承という課題を抱え始めていたヒロシマ・ナガサキ「体験」を、もう一度引き戻し、新しい連帯をもたらしたいことが挙げられる。今年の8・6や8・9の運動のスローガンや、広島・長崎両市長の平和宣言は、この2地域で被曝が終わることがなかったことを告げている。そして第4に、科学技術の限界や放射能管理の問題、エネルギーの浪費の生活、雇用や交付金など便宜供与といった利権と危険を引き替えにした原発立地地域の上になり立っている我われの暮らしの驕り、そして何よりも原発が政治的・経済的要請に国策であることについて、かなりの人が気づく契機をもたらした。したがって、都市部の人びとは、地方を搾取してきた構造に否応なく気づかざるを得ず、計画停電による水や食料品、乾電池などの買い占めパニックもあったが、おおむね「節電」には協力的であった。

■再帰的近代化とケアの思想

ところで、昨年11月後半、母1人子1人で40年暮らしてきた当時82歳の母親が衰弱し、何度か生死の境をさまよったものの小康状態を得て、3・11は4カ所目となる都内の病院に母親を入れていた時だった。大揺れは横浜の職場で体験し、その日は職場に泊まった。

メディアを通じて、車が流され、町が襲われてゆく津波のリアルタイム映像やその後の惨状の光景に。当てられ、何よりも万単位の犠牲者や行方不明者数と、そこに福島第1原子力発電所の爆発と放射能汚染が加わって精神的に打ちのめされ、1カ月間何も手に着かなかった。さらに、計画停電、電池・飲料・食品品をはじめとする買い占めやモノ不足、水道水の放射能汚染、電車の間引き



運転、不気味に続く余震など、あらゆる気の滅入る事態が追い打ちをかけた。毎日欠かさず病院に行く生活に、肉体的にも精神的にも疲れがたまってきていたし、母親のいなくなっただけで、地震でテレビ前や部屋に

平積みしてあった数千冊の本が崩れ、これもメンタル面で落ち込ませる大きな要因となった。

3月から4月までの1カ月間は、軽い鬱症状態だったのでないかと思う。病院の帰り、早めに自宅に帰るよう政府から要請があった夕方の都心は、足早に駅へ向かう人びとでいっぱい、都心の空は不安に覆い尽くされていた。まるで10年前の9・11後に米国に漂っていた黙示録的な空気のように。

一方で、違和感と怒りの1カ月間でもあった。マグニチュードや津波の大きさ、原発の防護策が「想定外」を繰り返す責任者や科学者たち。「ただちに身体に影響はない」を繰り返すメディアのアナウンサーや解説委員、そのメディアに登場する御用学者たち、そして内閣官房長官。原発に放水に行った男たちをまるで「爆弾3勇士」のように讃えるマス・メディアの言説。そして間もなく始まった「頑張れニッポン」キャンペーンと自衛隊へのエール。御用学者たちに、「恥」の概念というものはないらしい。

3・11以降、かろうじて書いた原稿は、最新の「ケアの倫理」を紹介するとともに、近代化によって生じる問題に対して近代化をもつて対置する「再帰的近代化」の失敗を指摘するフェミニズム本の書評だった。3・11を経験した者にとってはタイムリーで、母の病院に連日通いながら特に大袈裟な看護・介護をしているわけではないものの、弱い人に

寄り添い、どんな小さなことでもいいから心地よくさせてあげたい、という「ケア」への想いが実感された。片や、現在起きている原発事故、津波被害、計画停電、いずれも再帰的近代化のなれの果てに他ならない。

そこで思い出されたのは、当事者である弱者の側に寄り添って大学というアカデミズムを去った「ケア」の人、再帰的近代化を批判した科学者、高木仁三郎と、阪神・淡路大震災に遭遇し、被災者のための市民による条例づくりを奔走した小田実だ。どちらも「平均寿命」をまっとうせず病に斃れ、彼らがいなかったら「3・11以降」の市民パワーはまた違ったものになっただろうと残念でならない。だが、死者が生きていたならばと詮ないことを言っても始まらない。母は、意識はあるものの、バイパップという人工呼吸器のマスクを24時間装着しっぱなし、嚥下もできないので経鼻チューブによる栄養補給のみという状態だが、まずこの老母に寄り添うことが自分にとっての3・11からのリハビリなのだ、被災地への連帯なのだ、気を取り直して今年前半をやり過ごしてきた。

そのような今年の8月である。毎年のようにヒロシマ行動とナガサキに参加してきた者として、「フクシマ」がどのように加わるのか、この眼で見たい。そう思って多少認知症は進んだものの安定している母を病院にまかせて、8・6と8・9の現場に出かけてきた。

■フクシマとつながる「平和宣言」

8月5日、「8・6ヒロシマ平和のつどい2011」のプレ企画として、ピースリンク広島・呉・岩国が主催する米軍海兵隊岩国基地の視察ツアーに参加した。開発に膨大な借金を残してしかもそこに米軍住宅ができることされる愛宕山は、さらに整地が進んでいて、そこで出た土によって基地の沖合埋め立て事業が完了、昨年から新滑走路が運用されている。全景が見える丘からはホーネットが飛び立つ姿が、新滑走路に近いところからはC-2輸送機によるクッチ&ゴー訓練が、それぞれ見えた。毎年現地案内をしてくれる呉市議の田村順玄さんによると、これまで三沢と岩国だけは基地に対する住民訴訟が起こされてこなかったが、岩国爆音訴訟を準備中という。

8月6日朝は「グラランド・ゼロのつどい」が行なわれ、そこで「市民による平和宣言2011」と第九条の会ヒロシマによる「8・6意見広告」が配られた。平和宣言では、沖縄をはじめとする日本が米国の「核の傘」に従属させられ、同時に原発建設が政官財癒着の構造をつくりあげ環境破壊を拡大してきたと述べて、両者とも人道に対する罪であると指摘、「兵器という形であれ電力という形であれ、「核と人類は共存できない」というヒロシマの教訓」を拡大強化しないといけないとアピールする。意見広告は、「戦争も原発もない緑と青の地球を、未来へー子どもは、

おとなが守らんとイケンよね！」と見出しを掲げ、「原爆を投下された核被害国が核被害国になってしまいました。」《ヒバク、貧困差別：誰かの犠牲の上に真の平和は築けません》と、これもフクシマと連帯する論理を展開していた。

8時15分にはドーム前でダイイン、引き続き、原爆・核兵器なしで暮らしたい人々の主催による「原爆ドーム前のつどい」で「2011年 みんなの平和宣言」が読み上げられて、「地球を汚し 命を奪い 人間を破壊する核/原子力を 私たちは拒否します」という叫びがこぼれました。同時刻、広島市による平和祈念式では「平和宣言」が松井一實市長によって読み上げられたが、その内容は《核と人類は共存できない》との思いから脱原発を主張する人々、あるいは、原子力管理の一層の厳格化とともに、再生可能エネルギーの活用を訴える人々がいます。》と、まるで人ごとのようなものであった。

9時から、ドーム前を出発し中国電力本社を一周して平和公園まで戻ってくるウォーク。中電前ではすでに座り込みが行われており、傍らで右翼が野次っていた。

午後からは、広島歴史をみてまわる会的主催による「ヒロシマ スタディ ツアー2011」広島湾の戦争跡地と軍事施設を巡る「」に参加、おなじみの久保まさかずさん、新田秀樹さん、平賀伸一さん、そして湯浅一郎さんらの案内で、宇品港からフェリーで似

▼ヒロシマスタディ ツアー／広にある長浜地下工場跡入り口



島、江田島の旧軍や自衛隊の施設を見て解説を受け、呉港に上がって歴史の見える丘と「日本が一番近くで潜水艦が見える場所」というふれこみの海上自衛隊呉基地棧橋を見学した。実は3・11直後に、アフリカ・ソマリア沖の海賊対策として、海自の護衛艦が出港している。その後広（ひろ）まで出て、旧海軍工廠の山すそにつくられた地下工場跡を見学し、中へ入った。機密上、また空襲を避けるために山をくりぬき、その劣悪な環境の中で旋盤などを使って兵器部品を造っていたのだ。今回は予約参加者が少なく、本来基地コースと戦跡コースの2グループに分かれるはずだったのが統一グループとなり、それが大変に「お得」でもあった。

8月9日のナガサキは、あいにくの豪雨の

中、長崎市の平和祈念式典だけ出席した。田上富久市長による「長崎平和宣言」は、3.11より説き起こし、「〈ノーモア・ヒバクシャ〉を訴えてきた被爆国の私たちが、どうして再び放射線の恐怖に脅えることになってしまったのでしょうか。」と広島よりも1歩踏み込む。そして、原発の安全神話と同様核抑止力も信じてきたのではないかと問い、「1か所の原発の事故による放射線が社会にこれほど大きな混乱をひきおこしている今、核兵器で人びとを攻撃することが、いかに非人道的なことか」と述べて、「日本政府に憲法の不戦と平和の理念に基づく行動をとるよう繰り返し訴えます。」と要請した。

季節は秋となり、福島原発は予断を許さない状況だ。全原発が止められる気配もない。オバマの「核のない世界」も頓挫したままである。母は6カ所目の病院にいる。なかなか鬱の気分から脱けられないが、「希望」もまた最良の薬であろう。

(もろはし・たいき、本誌編集委員／写真も筆者)



原発災害を正しく知ろう

山崎久隆さんを囲む読者懇談会の報告

9月1日19時からの本会の参加者は34名、まず始めに山崎さんから16ページに及ぶ詳細なレジュメが渡され、レジュメに目を走らせ、スライドを見ながらの、密度の濃い時間となりました。

まず、地震列島日本に原発がある危険性について。東日本大震災は3つの巨大地震の連動であった、単発の地震でも余震によるダメージは不可避だと指摘されてきたのにこれでは原発がもつわけがない、耐震設計を甘く見た電力会社、東電はもとより国の責任は非常に重いと話されました。

「原発といふのはもともと電気を大量に使う装置で、停止後もこれほど大量の電気を残す装置はない。通常運転に不可欠の冷却機能も緊急時に必要な外部電源も、津波以前に地震で失われている。実は2010年6月に福島第一2号機で、外部電源喪失事故が起きている。そのとき非常用ディーゼルが起動したからいいじゃないかと東電は言い、そこで引き下がったことが今となって悔やまれる。想定される津波の高さを当時東電は3.1mから5.7mに突如書きかえていた。もちろん今回、非常用ディーゼルはあっけなく水没した。」

コンピューター上で非常時を再現して検証を行なう、つまり実地検証なしの「ストレステスト」が原発再稼働の要件だとは、絶対に認めるわけにいかない。」

次に現在も進行中の放射線被曝について3つの考え方を説明されました。第一に低線量被曝なら人体に悪影響はないとする考え方(日本でも東大、東工大などの一部(御用)学者が主張)、次に被曝量と有害度は直線的に比例するという考え方(世界的に主流)、そして、低線量の長期照射(内部被曝等)は有害度が著しく増すとし、食物にはより厳しい摂取許容基準を設けるべきとする欧州放射線リスク委員会等の考え方。詳しくお伝えできないのが残念です。(当日のレジュメをご希望の方には、残部が少しありますので先着順で差し上げます。事務局宛にお申し出下さい)

休憩のあと、放射能汚染の現状は？除染の方法は？など参加者から熱心な質問が相次ぎ、気がつけば40分も予定時間を超過していました。マスコミに頼っていられない情報は自分で得なければ、と痛感した2時間半でした。(文責・阿部めぐみ)

山崎さんも度々講師をされる反原発の勉強会が、ほぼ毎週「スペースたんぼぼ」で開かれています。問い合わせは、たんぼぼ舎(TEL:03-3298-9035、<http://www.tanpoposya.net>)

20歳代から30歳代にかけて、憑かれたように、年間数百本の映画を観つづけた。1970年代がおもだったろうか。休日は、深夜もふくめて、コカコーラでアンパンを胃袋に流しこみながら、映画館と古本屋を飛び石づたいにハシゴしていた。当時は、封切映画館でも2本立てが当たり前だったので、オールナイト興行で五本、新作を二軒こなせば、1週間に9本を観ることになり、年間鑑賞数が400本を超える勘定だ。上映中に入館し映画の途中から見始めるのは平気だったし、つまらなければ途中で出る決断も速かった。

インターネットは 連載エッセイ第25回

おろか、「ぴあ」のような情報誌もなく、どこの映画館でなにを上映しているかは、

映画を観ていたころ

東京新聞の金曜日夕刊に載る広告が頼りだった。マキノ雅広監督の名作「次郎長三國志」シリーズ全9本を見なければと必死の時期があり、その第5作「殴り込み甲州路」(1953年)の文字を新聞広告で見つけ、勇んで川崎まで出かけていったところ、「甲州路殴り込み」という、まったく別の次郎長もので落胆した記憶がある。

当時は、ビデオといった便利な記録媒体もなく、「映画を観る」行為は「1回限りの出会い」だった。いちど観ただけで映画批評を書けるくらいに、セリフや身振りなどの細部

を記憶しなければならなかった。映画館を出るやいなやメモを取るクセもついた。記憶のとどめかたや情報の整理術は、このころの映画体験がもとになってつくられたのかもしれない。学術的ではなく、きわめて娯楽映画的なのだ。

スクリーンに接する回数は、400本が300本へ、300本が200本へとじょじょに減り、いまでは年間せいぜい50本くらいだが、数多くの映画を観るなかで、身に染みてわかったことがある。「当たりは、10本に一本くらいしかない」。1本の「当たり」

に出あうためには、10本を観なければならぬ。さらに、傑作と断言できるような一本に遭遇するには100本を観る覚悟が必要だ。確率の問題ではない。10本、100本と観つづけることで、自分にとっての「当たり」を見つけられるようなのだ。

「失敬する」の怖れているようなかのような。映画ばかりではなく、本選びでも、失敗を避けようと、世評をまず調べる。結果、評判のよい映画や本だけに客が集中する、いわゆる「1本かぶり」の現象が起こる。買い物全般

鈴木一誌

にも言えることだろう。失敗を避けようとするのは、わたしをふくめて年配者も同様ののだが、これは好きにすればよろしい。若いひとこそ、下品、グロテスク、愚作と指弾された作品から、自分にとっての「当たり」を見つけないならぬのではないか。「当たり」の体系が「自分」をかたちづくるからだ。「1本のために10本を観る」との原則は、「10本のうち9本はゴミだ」とも言い直せよう。基準によっては「99本がゴミ」となる。「10本のうち9本はゴミだ」との心得は、観客「ユーザー」消費者として獲得されたものだが、その断言は、作り手のがわにも反転する。デザイナーである自分がつくりだす「10本のうち9本はゴミ」かもしれない。自分で立てた観客の原則が、わたしを貫くのだ。

多くの成人は、消費者であると同時になにごとかの作り手や送り手でもある。ひとは、サービスを受けとる反面、サービスを提供する局面をもつ。純粋な消費者などどこにもない。「10本のうち9本はゴミ」との視点は、ユーザーの立場を声高に主張するのではなく、作り手に立ちうる自分を見直す視点でもある。駄作には駄作と言わざるをえないが、他者を斬る刃は、自身をも切る。ゴミを生みださないよう、丹念なしごとをするほかない。

(すずき・ひとし、グラフィック・デザイナー、題字デザイナーも筆者)



アシリチュブノミヌサ（祭壇）・イナウ（木幣）は朝から手作り。

いま、改めて「民族」を問う —アイヌ民族をめぐる動き

垣内 成子



私は、万物に宿る神々とともに大地に生き抜いてきた「先住民族」であるアイヌ民族（以下、アイヌ）・琉球民族と交流を重ねるうちに、側面からの支援ではなく、非アイヌも参加できる「ベウレ・ウタリ」の会（以下、同会）会員となった。

毎年9月中旬
旬に札幌市・
豊平川河川敷
で行われてい
るアシリチュ
ブノミは、故
郷を目指して
川を遡る新し
い鮭を迎える
儀式。アイヌ
復権運動の一
つとして、ま
た伝統文化を
後世に伝える
ため100年
余も失われて
いた儀式を札

幌アイヌ文化協会が1982年に復活させ、
本年は30周年を記念して同会が招かれたため、
9月10、11日に同行した。10日は、前夜祭に
先立ち若き友人の結婚式―神々に感謝の祈り
を捧げる荘厳なアイヌの式に連なれたことに
感謝している。

本稿では、アイヌ政策の最近の動きと、首
都圏在住のアイヌを中心に述べたい。

ドキュメンタリー「TOKYOアイヌ」

ドキュメンタリー映画「TOKYOアイヌ」
<http://www.2kamyrintara.com/film/>
を是非ご覧いただきたい。自主上映も可。
経済的な事情や差別など様々な理由により

多くのアイヌが北海道から首都圏に移住した。
この映画は、首都圏に暮らすアイヌのイン
タビューを中心に、アイヌとしての活動や個
人の確立をも描き、私たちが多文化社会に向
き合い、どう生きるべきかを示唆している。

首都圏アイヌが求めるもの

首都圏在住のアイヌは長年にわたり日本政
府に対して、北海道在住アイヌと同等の支援

と、「ウタリ（同胞）が集い、学べる場」を要
求している。

「アイヌ、ネノアン、アイヌ（人間らしく
ある人間）」戦争も差別もなく、自然と共生で
きる地球（ほし）を求める彼らの「想い」を
共有し、要求を実現するため、是非！皆様の
お力をお借りしたい。

アイヌが辿られた「途」

紙面の都合上、アイヌが負わされた歴史の
ごく一部を記そう。

1869年「戊辰戦争終結、蝦夷地を北
海道と改称、1871年「戸籍法でアイヌ
を日本国民に強制編入、1878年「アイ
ヌの戸籍完了に伴い、その呼称が「旧土人」に
1899年「北海道旧土人保護法」制定に
より、①土地の没収 ②漁業・狩猟の禁止
③固有の習慣風習の禁止 ④日本語使用の義
務 ⑤日本風氏名への改名による戸籍への編
入、などアイヌの歴史・文化・暮らしへの過
酷な圧迫。1997年7月1日「アイヌ文
化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識
の普及及び啓発に関する法律」の施行により
「旧土人法」廃止。2008年6月6日「ア
イヌ民族を先住民族とすることを求める」国
会決議採択。

日本政府は今日まで、北海道と沖縄を植民
地として認めたことはない。しかし、この二
つの地域が植民地として日本に一方的に併合
されたことは、アイヌや琉球民族の視点に立

ては明らかである。

「先住民族の権利に関する国連宣言」

2007年9月13日に採択された同宣言は、「先住民族に対する差別を禁止し、彼らの権利を明確に保持し、彼ら自身が目指す経済・社会的開発の継続を促進する」と記している。

1982年8月、同宣言採択起草に向けた国連「人権委員会」の「先住民族作業部会」設置後25年を経て漸く採択された。同部会が人権侵害の当事者である先住民族を参加させたことは画期的であった。このことから同宣言は、単に国連から与えられたものではなく、世界の先住民族が共同の闘いを展開することにより自ら勝ちとった成果である。

また、第43条が規定するように同宣言は「世界の先住民族の生存、尊厳および福利のための最低限度の基準」である。

さらに、権利を否定する暴力行為に、強制移住などが明記されたことに加え、強制同化政策が人権侵害として明示された意味は極めて大きい。

アイヌ政策の最近の動き

2010年7月29日「アイヌ民族のあり方に関する有識者懇談会」報告が提出され、これに基づいて「アイヌ政策推進会議」は二つの作業部会（「民族共生の象徴となる空間」、「北海道外アイヌの実態調査」）を開催し、本年6月24日の全体会議で、それぞれまとめた報告が

なされたが、いずれも前述「国連宣言」の内容を反映する政策が打ち出されていない。

同会議は、山積する「アイヌ問題」のうち、「民族共生の象徴となる空間」と、道外アイヌの実態調査の実施、という狭い範囲の課題を検討するだけに狭められている。

遑つて2010年3月、国連の人種差別撤廃委員会は、「国連宣言」が限定的にしか反映されていないと指摘し、「先住権（政治的自決権や土地・資源の権利）」を含む46項目の権利について、国連宣言の実現を検討する会合を

設けるよう勧告しているが、この勧告も無視されている。

道外居住アイヌ―初の実態調査

前述の「アイヌ政策推進会議」が初めて実施した「道外アイヌ民族の実態調査」では、道外に居住するアイヌも収入や教育面などで全国平均との格差があり、道内のアイヌ民族と同様に困窮している実態が明白となった。

調査結果によると、世帯収入が300万円未満と回答した割合は44・8%（道内アイヌは同50・9%）。さらに、20・5%の人がアイヌであることを理由に差別を受けたと回答している。

同報告書の冒頭には「政策展開に当たったの基本的な理念」として「国が主体となった政策の全国の実施」が掲げられており、具体的政策として「アイヌの人々が、居住地に左右されず、自律的に生を営み、文化振興や伝承等を担えるようにするための支援が必要であり、全国の見地から必要な支援策を実施していくことが求められる。」との記述がある。この理念が建前ではなく、アイヌの要求通りに実現されるよう活動を続けてゆきたい。

（かきうち・しげこ、本会事務局）



結婚式の1シーン、ウエケウイベ（契りを交わす食事）。山盛りの白飯を互いに食す。沢山食することで愛情の深さが……

運動の現場から

9・11 人間の鎖
2000人が経産省を包囲

北原博子

福島原発事故・大震災の3月11日から6カ月となる9月11日、「9・11―19再稼働反対・脱原発全国アクションウィーク」の一環として東京でもいくつかの行動がとりくまれた。9月13日現在の集計では、全国60カ所で1万2000人が行動に参加した。

館前を通過して、日比谷公園に戻る短いデモ（40分くらい）のあと、休憩をはさんで経産省を人間の鎖で囲む行動に参加した。

この日は新宿でも素人の乱主催の「原発やめろデモ」があったが、私たちが参加した日比谷・霞ヶ関にも残暑厳しいなか、多くの子供連れや若い人、年配の方が集まった（デモ

市民の意見30の会・東京は、再稼働反対・脱原発！全国アクション実行委員会が主催した日比谷公園を出発して、東電本社前から新橋駅を周り、経済産業省本館前を通過して、日比谷公園に戻る短いデモ（40分くらい）のあと、休憩をはさんで経産省を人間の鎖で囲む行動に参加した。

この日は新宿でも素人の乱主催の「原発やめろデモ」があったが、私たちが参加した日比谷・霞ヶ関にも残暑厳しいなか、多くの子供連れや若い人、年配の方が集まった（デモ2000人、人間の鎖2000人）。市民の意見30の会・東京では、ヒマワリの種付きの風船を必死でふくらまし、デモ・人間の鎖アクションで配りながら、経産省前で一斉に青空へ飛ばした。風船はデモ、人間の鎖行動と併せて500個を用意したが参加者には大人気であった。色とりどりの風船を持ちながらのデモは深刻な問題を訴えているにもかかわらずほのぼのとして、町行く人にも好印象を与えたのではないかと思う。また青い空に風船が飛んでいくさまは、なかなかフォトジェニックで、マスコミにも報道された。

参加者たちは、経産省の周囲約900メートルを余裕で取り囲み、ボードを掲げたり、ウエーブを何度も繰り返したりして原発を止めようという強い意志を表した。

今回のアクションは前回のニュースが伝え

た、6・11の芝公園から東京駅先までのデモに比べて圧倒的に若い世代が増えたように思う。いつもの9条改憲反対の集会やデモで見かける顔のほかに、赤ちゃんや幼い子供を連れてきた多くの若い人達をみるにつけ、マスコミはあまり取り上げない何かがあるに育ちつつあると思う。取材も多くきていたようだが、参加者につっこんでインタビューしていたのは、外国メディアが多かった。日本のマスコミは遠巻きにして絵を撮っているだけという印象を受けた（翌日は新聞休刊日だったが、朝日以外の夕刊各紙で報道された。朝日は福島、代々木公園、新宿の行動のみ）。

原発周辺を「死の町」と表現した経産大臣が記者たちとの内輪の会話の内容を取りざたされて更迭され、新宿のデモでは12人の逮捕者が出たという。私たちが立ち向かう相手は手段、手口を各種とりそろえて原発温存をはかろうとしているようだ。しかし、原発を維持し利益を得ている人と損害を被った人、あるいはこれから被るかもしれないと怖れる人の数を比べてみよう。原発をなくしたいと思う人のほうが圧倒的に多いのは明らかだ。

12月から来春にストレステストが終了する13基の原発を再稼働させないことが決定的に重要な課題となる。予断は許さないが原発を止める大きなチャンスでもある。自信を持って行動を続けたい。

（きたはら・ひろこ、本会員）
（写真／北原あや子）



市民の意見30の会・東京は、再稼働反対・脱原発！全国アクション実行委員会が主催した日比谷公園を出発して、東電本社前から新橋駅を周り、経済産業省本

のら 動か 現場 運動 運現

3・11で私たちは気づいた 反核・反戦・反差別 「ぶっ通しデモ」の50日

白田 敦伸

連続デモを決めたわけ

7月3日、ぶっ通しデモ実行委員会の一回目の会議が行なわれた。集まったのは、日頃から沖縄の米軍基地問題を始めとして様々な社会問題に取り組み現場を一緒に闘ってきた仲間である。会議を呼びかけた自分できえ、50日間連続デモの実現可能性には確信が持てないままの第一歩だった。



ハンドマイクでアピールしながら新宿の街を行く
「新首相野田は 原発、戦争、増税をやめろ！」デモ 2011.9.4

私たちが、まず共有していたのは、「脱原発」の一点で集まり、他の問題を持ち込むことを殊更に拒絶し、しかしながら多くの参加者を集める「脱原発運動」の流れへの違和感。原発関連の運動の盛り上がりに対し比例するように後退していく他の社会運動に対する焦燥感。そして、これから迎える電力ピークに、原発推進勢力による熾烈な巻き返しが始まること予想されることに對する危機感である。

原発推進勢力の巻き返しやミスに即座に對抗していく手段として、電力ピークを迎える8月に連日デモを行なうことを決断するのに時間はかからなかったが、問題はさまざまな社会問題を繋げていく方法であった。私たちは、社会全体を覆う全ての問題を訴えるほどの知識も力量も持っていなかったし、デモで訴えることの限界は今まで多くのデモを企画してきた私たち自身良くわかっていった。

試行錯誤のなかで

私たちは、さまざまな社会運動に関わる中で、社会の矛盾や、運動の矛盾と向き合い、もがいてきた。その中で、自分たちの力量で出来ることをやってきたし、出来ることをやりながら、考え進んできた。今までがそうう

あったように、とりあえず行動しようとするメンバーが集まったことが、今回の企画が成立した一番の要因かもしれない。その中で、東電前を通るデモコースでさまざまなテーマでデモを行なうことで問題がつかないかと提議があり、試行錯誤しながら今も進んでいる。私たちの選択した手段が、全ての問題を繋げることが出来ないが、少なくとも私たちが今まで関わってきた問題と原発の問題を多少なりとも繋げることが出来たのではないだろうか。

今この文章を書いている時点で、ぶっ通しデモは残り一週間となっている。今まで、ぶっ通しデモは、最大で30人前後、最小で4人、平均して10人強の参加者数で毎日デモを行なっている。残りの一週間がどのようになるかはわからないが、大きな変化はないと思われる。参加者数を単純に見れば、私たちの50日間のぶっ通しデモの社会に与えた影響は小さかったかもしれないが、私たち自身が、多くの新しい仲間と繋がれたことは大きな喜びであったし、これからも続く闘いの中で必ずプラスとなることは、皆が確信するところである。

また、京都で開催された「一週間ぶっ通しデモ☆アゲンスト原発」(5・16〜5・22)の行動が、50日間ぶっ通しデモのきっかけとなった。新しい試みを企画し実行した「関電の原発を止める会・大風呂敷(仮)」の仲間

に敬意と共に感謝したい。
9月10日にぶっ通しデモは最終日を迎えるが、その後もさまざまな現場で、今回出会った多くの仲間と共に闘っていきたいと思う。

最後に、ぶっ通しデモの呼びかけ文を紹介したい。
うすだ・あつのぶ、ぶっ通しデモ実行委員会

【呼びかけ文】

私たちの生活は、3.11を境に大きく変わった。私たちは、今まで当たり前だと思っていた日常を奪われた。天気の良い日に外に出る自由、風を感じる自由、そんなちっぽけな自由さえも奪われ、今は放射能に怯えた抑圧された日常を強制されている。

3.11以前は、何の問題もない社会だったのか。3.11以前から多くの社会問題があったし、抑圧される日常が強制されてきた仲間は多かった。私たちは一体何をしてきたのだろうか。他人事のように何もしてこなかったのかもしれないし、何も出来なかったのかもしれない。

しかし、3.11で私たちは気づいた。もう、政府やマスコミ、資本家の言いなりにはならないし、分断もされない。私たちは、抑圧された全ての仲間とつながり、共に闘うことを決意した。

私たちには、現実を変える力があるし、目の前には変えななきゃいけない現実がある。

(ぶっ通しデモ実行委員会 <http://buttoshi.web.fc2.com/>)



サウンドカーも大活躍

19時に駅前集合19時半出発、東電・経産省をめぐる「新橋コース」と「新宿巡回コース」が主だが、「渋谷・原宿コース」もあった。

7月23日から50回行われたデモのテーマは毎回さまざま・・・「福島原発事故は終わっていない～残された命を見捨てるな～動物デモ」「被曝労働を前提にするな!」「かっべの逆襲～地方を犠牲にするな!」「沖繩・高江を守れ!」「反核マスクデモ」etc...だが、テーマ以外のプラカードとのぼりも、いつも大歓迎だった。

最終日の9月10日は、約80名の参加者が、ともに渋谷の街を練り歩いた。



移動中の車中でも注目的! 「節電キャンペーン ヤな感じ! デモ」

のら 動場 現場 運現

基地も原発もない平和を

— 8・15アクション報告 —

吉田 和雄

「基地も原発もいらない！どこにも！8・15アクション」は、ご賛同いただいた皆さまの手で、札幌、福島、小田原、祝島、沖縄の各地で、反戦・反原発のメッセージを添えて、平和希求をアピールしました。

福島では「子ども福島子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク」が、「8・15世界同時多発フェスティバル FUKUSHIMA」で150個の風船をあげました。山口県の祝島では、上関原発の建設中止を求めて30年も毎週続けられている月曜定例デモの中で、300個の風船がとばされました。（すべて環境負荷の少ない天然ゴム風船、ペーパークリップを使用しています。）

ご賛同くださった皆様、カンパをお寄せくださった皆様、ほんとうにありがとうございました。

（よしだ・かずお、本誌編集委員）

基地も原発もない平和を！

①

②

①沖縄・読谷村の元米軍補助飛行場跡地から青空にあがったアドバルーン。100個のメッセージつき風船もとばしました。（写真/垣内成子）

②沖縄・恩納村、国道58号沿いに設置した大横断幕。自衛隊分屯地に隣接しています。目には見えますように！（写真/垣内成子）

③北海道・札幌市大通公園では、泊原発の再稼働中止を求める署名行動と共に、札幌の市民団体「Shut（シャット）泊」「福島の子供たちを守る会・北海道」など50人の参加者が、2日間で200個の風船をとばしました。雨の中、子供たちも！（写真/小林芳子）

④神奈川県・小田原市では、小学校の校庭から、議員・市民らが、雨空をつきあげるように風船300個をとばしました。（写真/野澤信一）

④



③



基地に頼らない平和を！ 原発もサヨナラ！
市民の意見30の会・東京

失われた世界への哀惜



ナージャの村

企画・監督/本橋成一 撮影/一之瀬正史 編集/佐藤真 音楽/小室等 語り/小沢昭一 1997年日本映画 118分 DVD発売元/ポレボレタイムス社 販売/紀伊国屋書店



カリーナの林檎〜チェルノブイリの森

監督・脚本/今関あきよし 脚本/いしかわ彩 撮影・編集/三本木久城 音楽/遠藤浩二 ナレーション/大林宣彦 出演/ナスチャ・セリヨギナ タチアナ・マルヘリ リュドミラ・シドルケヴィッチほか 2011年日本映画 109分 11月中旬東京・シネマート六本木をはじめ、全国で順次公開

- 緑の草木が溢れるベラルーシの田舎。老女と、8歳になるその孫娘が仲良く暮らしている。井戸から水を汲んで運び、野生のリンゴを摘んで食べる生活を、少女は心から楽しんでいる。台詞らしい台詞もなく、画面は絵本の挿絵を切り抜いたかのようなようだ。
- 迎えの車が来て、少女を大都会（首都ミンスク）に運ぶ。巨大団地の一フロアに住む叔父一家に彼女は預けられているのだ。母親は入院中、父親はロシアへ出稼ぎに行つたまま、叔父の稼ぎは悪くいつも不機嫌な叔母は少女に優しくしない。都会の小学校にもなじみず、唯一の楽しみは母親を見舞いに行くことだけ。「なぜ前のように家族一緒に田舎の家で暮らせないの？」という彼女の問いに、母親は答える。「それは、チェルノブイリというお城にいる悪魔が、毒を撒き散らしているからよ」
- 田舎の祖母が病に倒れ、母親の容態も悪化して集中治療室に。少女自身も病気が再発して入院する。同じ病室の子どもたちも次々と死んで行く中で、彼女はある決意を固め、病院を抜け出してチェルノブイリの森へと向かう。
- 少女の自然な愛らしさ、ロシア人俳優たちの抑えられた達者な演技、映像本位の、よく練られたシナリオによって、地味だが強く訴える力のある作品になっている。しかし、この映画が最初に完成したのは7年前の2004年で、当時日本ではチェルノブイリ原発事故のことはもはや関心が薄く、そのため公開のめどが立たなかったのだという。ようやく事故から25周年にあたる今年に公開が決まり、スタッフが現地の新しい映像を撮り足して再編集、チラシやポスターを準備しているさなかに、3月11日を迎えた。はからずも、映画の中に出てくる子どもたちの姿が、福島の子どもたちと重なり合うことになりかねない事態となった。
- チェルノブイリ事故とベラルーシ住民の生活を扱った作品といえば、本橋成一のドキュメンタリー「ナージャの村」（1997年）と「アレクセイの泉」（2002年）にも深い感銘を受けた（DVD販売/ポレボレタイムス社）。政府の移住命令を拒否し、放射能汚染地域で昔ながらの自給自足の生活を続ける年老いた農民たちの姿を、本橋は深い愛惜の念をこめて丹念に描いた。
- 今関も本橋も、現代文明の鬼子ともいえるべき原発が、美しい自然と調和して生きていく人びとの暮らしをいかに破壊したか、いまの世代限りで滅びようとしている文化や人生のスタイルが、いかにかけがえのない貴重なものであるかを描いている。しかし科学文明の恩恵とリスクにどっぷり浸っている私たちが知らずと、実は彼らの生活自体がとうに失われた、手の届かない世界のようにしか見えぬの。私たちは、果たしてどこまで引き返せるのだろうか。

本野義雄（もとの・よしお、本誌編集委員）

「沖縄」

「アリは象に挑む」

(由井晶子著／七つ森書館／1800円＋税)

人災の年譜

村雲 司

軍事基地の問題は、どのように些細なことであろうと、一国の平和に関わることとして、全国民の問題である。ましてや米軍基地となれば世界規模の問題となる。この重い課題を孤立して背負わされ続けて来たのが沖縄である。その苦闘を仔細に記録した本、『沖縄』を紹介したい。

著者・由井晶子さんが、1998年から2011年まで、沖縄における普天間基地移設問題の動きを「労働情報」誌に掲載した



由井晶子

ものだ。だから単なる歴史書ではない。掲載時の流動する状況

に対する思いが同時進行で綴られている。沖縄の人々の期待がどのように裏切られ、希望がどのように繋がれて来たのかが、生々しく伝わって来る。

1995年9月4日、米兵3人による12歳の少女に対する性暴力事件が起こった。それを端緒に、沖縄の人々は、遂に超党派で結集し、8万5千人の県民総決起集会を開いた。

この情勢を沈静化させようとして1996年に発表されたのが、普天間基地全面返還の日米共同声明である。その時、何と「5年から7年以内」と、具体的期限まで明示されていた。

ところがその後、代替施設を県内に建設する政府間の約束が明らかにされた。強行しようとする日米政府と移設先とされた辺野古をはじめ沖縄の人々の根強い抵抗の中、15年後の今も、世界で最も危険な普天間基地は、変わらず存在し続けている。

この本には日米政府の手續主管の15年、そして背景にとぐる巻く戦後66年の歴史が、さまざまなと描きだされる。



2011.6.23 慰霊の日、由井晶子さん (写真/大木晴子)

これはまさしく人災ではないか。繰り返し押し寄せる津波という天災にもまさる、恐るべき人

災の津波ではないか。震災と同様に、沖縄の平穏な日常を奪い続ける人災。

この人災はどのような仕組みで起こるのか。官僚は日本政府や国民ではなく、まず米政府の顔色をうかがう。日本政府も同様だ。例外的に変革を期しても、官僚が動かなくては手も足も出ない。そして、その理不尽に目をつむり続ける本土のマスコミ。2004年、普天間の米海兵隊ヘリが沖縄国際大学に墜落して、普天間基地の危険度を白日の下にさらす事件が起きた時さえも、なんとプロ野球巨人の渡辺恒雄オーナー辞任のニュースを優先させる有様だった。そして何よりも、ナベツネ辞任に心奪われるばかりの、われわれヤマトンチューである。これらが沖縄人災の複合震源である。

天変地異は避け難いが、人災ならば必ず防ぐ手立てがあるはずだ。まず最も大きい人災の源、われわれ本土の人間が変わらねばならない。在日米軍基地の75%を沖縄に押し付け、見て見ぬ振りをして過ごす。この欺瞞に満ちた姿勢をまず変えなければならぬ。官僚を、政府を、マスコミを変えるための、それが第一歩だ。

アリの1匹となつて、象の脚に這い登る覚悟を持つと、1ページ毎に、淡々と事実をもつて迫って来るこの1冊を、是非とも多くのヤマトンチューに読んで貰いたい。

(むらくも・つかさ、「梅が丘通信」発行人)





脱原発の書籍数点のご紹介

—脱安保との関連の意見も注目—

吉川 勇一

◆3・11以後、脱原発の書籍は多数出版され、とても全部は眼が通せない。ごく一部だけになるが、何点かをご紹介します。

まず広瀬隆の2点。「原発破局を阻止せよ!」(朝日新聞出版、1200円+税)は最新のもので、「週刊朝日」で現在も連載中の記事の編集だ。その冒頭に編集者の堀井正明が書いているが、元来は、3・11よりも半年以上も前に、今読んで驚くほど、今回の大地震、津波、そして福島原発事故を完璧に予想し、



警告し、戦慄した書籍を広瀬は出版していった。それがもう一冊の「原子炉時限爆弾」(ダイヤモンド社、1500円+税)だった。

◆まず新著のほうを読みたい。非常にわかりやすく、興味深い具体例や写真、図例とともに書かれてある。リニア中央新幹線が無用の浪費と指摘されたり、中国と日本の事故に共通の隠蔽体質があるという論述など、新鮮な内容であり、かつ納得できる。そして、さらに地震と原発の関連について広く読むのなら、後者をお勧めする。これもわかり易い本だ。

◆この中で、広瀬は、地震学者の石橋克彦が「原発震災」と呼んで、前から問題提起を続けてきたと述べている。この石橋が編集した書物に「原発を終わらせる」(岩波新書、800円+税)がある。全部で14人の専門学者が、原発の問題性をそれぞれ多角的に考察したものだ。その最後に、本会の会員でもある原子力資料センターの共同代表、山口幸夫が、「原発のない新しい時代に踏みだそう」と書いているが、まさにその指摘の通りだ。ただ、残念なのは、全員が専門的な学者のせいか、正確に論述するためだろう、注や括弧内の説明などを入れすぎ、かなりわかりにくい文が少なくない。もっと素人にわかりやすい表現だったら、と



◆「磁力と重力の発見」の著者、山本義隆が思う。

福島の 原発事故を めぐって

いくつか学び考えたこと

山本義隆

一刻も早く原発依存社会から脱却すべきである——原発ファシズムの全貌を追い、容認は子孫への犯罪であると説いた「磁力と重力の発見」の著者、書き下ろし。

みすず書房 定価(本体1600円+税)

最近出したものが「福島の原発事故をめぐって」(みすず書房、1000円+税)だ。これは「磁力と重力」とは違い、素人もよく分かるような表現だ。冒頭、日本の「原発開発の真相底流」で、岸信介や中曽根康弘の動きなどを読んでいて、まったくそうだ、そうだと口に出してまいりそう、50年代以降の日本の政治・経済の動きが説得力をもつ論述となっている。

◆後半「科学技術幻想とその破綻」では、「二六世紀文化革命」2巻(みすず書房)の著書だけに、山本は原子力は「かつてジュール・ヴェルヌが言った『人間に許された限界』を超えていると判断しなければならぬ」と断言し、「原発ファシズム」という言葉まで使いつつ、「根本的に新しい社会のあり方を見出すべき時がすでに来ている」と指摘する。脱原発以外に道がないという山口幸夫と同じである。お勧めできる。

◆1980年、市民の意見30の会の出発の際に、「日本を変える30の提言」を発表したが、

その第1項は「この社会を『核』のない社会にしよう。そのための手だてをつくそう。核兵器も原発も、核燃料再処理工場もいらない。再処理工場の建設はやめよ。非核3原則の厳守」だった。そして26項目には「憲法第9条の実現をめざせ。まず日米安保条約を辞め、米軍基地を撤去し、軍事予算を削減し、自衛隊をなくせ」とあった。だが、この原発と安保体制との関連を指摘した論述はこれまでにほとんどなかった。本来、日本の構造の本質には、その二つが深く組み込まれているのだが。

◆そこを鋭く追究した初めてといえる論文が近く出る。10月中旬に社会評論社から出版される武藤一羊の「潜在的核保有と戦後国家―フクシマ地点からの総括」に含まれる、最新の書き下ろし論だ。安保と原発の関連を指摘した武藤は、反核活動家の森滝市郎や今堀誠二たちの論を具体的に分析して、戦後の反核運動の経過をのべながら、山本義隆が辿った戦後の日本政治の中での原子力「平和利用」問題の経過を詳細に論ずる。

◆そして、最後に武藤は、「新しい見通しは、非核化・非軍事化のそれである。アジア地域をめぐる関係全体を非軍事化する、それへ向けての下からの―民衆レベルの―非戦・非暴力の連帯を基礎にして、日米関係の非軍事化―そのカナメは沖縄からの米軍基地の完全撤去―と東北アジアの非核化と多角的平和保障関係の形成にむかう見通

しである。それを実現するためには、日本が米中の覇権戦略のどちらにも加担しない立場を明確にし、領土問題をふくむ懸案を武力による威嚇によらずに解決する新しい方式を見出すことが必要である。／3・11がもたらした日本国家の破綻状態からの脱出口は、戦後日本の二重の核依存と引きつぱり手を切り、脱原発・脱覇権・非軍事化に向けて一歩をふみだすことにある」と結論する。重要な内容で、必読書の一つだろう。

◆東日本大震災の写真集もかなりの数で発行されている。例えばこの2点の写真集も、さまざまいい映像には声を呑む。その大部分の写真は津波の被害のものだが、一部には福島県



双葉町や大熊町などでの原発関連のものも含まれている。豊田直巳編『東日本大震災記録写真集』

TSUNAMI 3・11」(第三書館、2800円+税) および第三書館編集部編の同書名「PART2」(同定価)である。

◆最後の一点は、書物とはいえないパンフレットだ。「横須賀の原子力空母母港化の是非を問う住民投票を成功させる会」制作の「横須賀の港に浮かぶふたつの原子炉」である。B5変形16ページで定価100円である。薄いパンフとはいえ、横須賀軍港に配備されている原子力空母「ジョージ・ワシントン」にある二つの原子炉がいかに危険かを具体的に解説する。同艦にある2基ある熱出力60万kWの原子炉は、福島原発の兄弟だと指摘し、巨大地震と津波はいかなる危険を引き起こすかをのべるとともに、すでに艦船修理時に放射能事故が多くあったとも明らかにする。ぜひご覧いただきたい。(連絡先)〒233-0002 横須賀市大滝町1-26清水ビル3階 横須賀市民法律事務所 所方「横須賀の港に浮かぶふたつの原子炉」発行者 電話046-1827-12713、FAX046-1827-12731



(よしかわ ゆういち、本誌編集委員)



2011. 8. 11. 9:30PM

Information

【東京都】 ☆10月6日(土) 13時30分から「新しい「カゾク」を生きたいー私たちの試み」 場所：立川シビル 2階A室 (JR中央線「立川」駅南口、徒歩3分) 受講料：1000円、シビル会員A/ 経済的困難者800円 主催：シビル、電話042-524-9014

☆10月15日(土) 17時45分から「日米安保体制・核(兵器・原発)問題の源流と現在を問う」 講師：浅井基文、場所：文京区民センター (地下鉄都営線「春日」駅、地下鉄丸の内線「後楽園」駅、徒歩5分) 資料代：500円、主催：反安保実行委員会、電話03-3254-5460

☆10月22日(土) 18時15分から「学校に自由と人権を！ 10・22集会」 講師：斎藤貴男ほか、場所：全電通会館ホール (都営新宿線「小川町」駅、地下鉄千代田線「新お茶の水」駅、徒歩1分)、主催：10・23 通達関連裁判訴訟団 (16団体)、連絡先：近藤 (被処分者の会) 090-5327-8318

☆10月23日(日) 13時30分から「第6回戦後補償のゆがみを正し、すべての人々が分かち合える平和を求める浅草ウオーク」 *集会場所：台東区民会館9階 (都立産業貿易センター内) ウォーク：花戸川公園 (台東区民センターとなり) (東武線・都営浅草線「浅草」駅、徒歩8分、主催：浅草ウオーク実行委員会、(連絡先) 東京都原爆被害者団体協議会03-5842-5655、東京空襲犠牲者遺族会03-3616-2338、和ピースリング090-2524-4821 (野上)

☆11月12日(土) 13時30分「さんぎゅうハウスシンポジウムー助け合い・分かち合いの社会をめざして」 話：稲葉剛、富松玲香、場所：アミュー立川第一会議室 (JR「立川」駅、徒歩5分) 資料代500円、主催：NPO 法人さんぎゅうハウス、電話042-512-7541

☆11月26日(土) 14時から「みなと9条の会第21回集会「憲法9条を守る一点で手をつなごうー原発と被曝労働をめくって」 話：渡辺実紀子、歌：ナターシャ・グジー、場所：高輪区民センター (地下鉄南北線「白金高輪」駅、徒歩0分)、参加費：1000円、主催：みなと9条の会、電話03-3586-3651

【埼玉県】 ☆開催中から10月15日(土)まで「大道あや」展、場所：原爆の図丸木美術館 (東武東上線「東松山」駅・「森林公園」駅タクシーで12分、「東松山」駅東口、市内循環バス「唐木コース」浄空院入口下車、徒歩5分、東武東上線「高坂」駅西口、市内循環バス「唐木コース」丸木美術館北下車、徒歩2分) 入場料：大人900円、中学生・18歳未満600円、小学生400円、障がい者大人450円、中学生・18歳未満300円、小学生200円 主催：原爆の図丸木美術館、電話0493-22-3266 休館日：毎週月曜日

☆10月22日(土)から12月3日(土)「今日の反核反戦」展 2011 場所：原爆の図丸木美術館 (東武東上線「東松山」駅・「森林公園」駅タクシーで12分、「東松山」駅東口、市内循環バス「唐木コース」浄空院入口下車、徒歩5分、東武東上線「高坂」駅西口、市内循環バス「唐木コース」丸木美術館北下車、徒歩2分) 入場料：大人900円、中学生・18歳未満600円、小学生400円、障がい者大人450円、中学生・18歳未満300円、小学生200円 主催：原爆の図丸木美術館、電話0493-22-3266 休館日毎週月曜日

【愛知県】 ☆開催中から11月26日(土) 戦争と平和の資料館ピースあいち4周年記念特別展「現代の戦争と平和」 場所：戦争と平和の

資料館ピースあいち (地下鉄東山線「一社」駅、徒歩15分) 主催：戦争と平和の資料館ピースあいち、電話052-602-4222、休館日、日・月曜日

☆10月16日(日) 13時30分から シリーズ脱原発・脱軍事化を考える「第2回核と安保体制」 講師：愛敬浩二 場所：女性会館第3会議室 (地下鉄名城線「東別院」駅1番出口、徒歩3分、主催：不戦へのネットワーク)、電話052-731-7517

☆10月20日(日) 13時30分から シリーズ脱原発・脱軍事化を考える「非核の未来を作るために」 講師：湯浅一郎、場所：女性会館第3会議室 (地下鉄名城線「東別院」駅1番出口、徒歩3分、主催：不戦へのネットワーク)、電話052-731-7517

【広島県】 ☆11月1日(火) 18時30分から「憲法のつどい ひろしま 2011 原発は塀の上のたまご」 話：アーサー・ピナード、場所：中国新聞ホール 主催：広島県9条の会ネットワーク、電話082-222-0072、共済：ひろしま医療人・9条の会、電話082-262-5424

【兵庫県】 ☆10月22日(土) 14時から第32回小田実をよむ「共生の原理」 話：中村文生、参加費：1000円、場所：山村サロン (JR「芦屋」駅前ラポルテ3階)、問い合わせ：山村サロン電話0797-38-2585

☆11月20日(日) 13時から 2011・はばたけ9条の心 講演：田中優子、コンサート：深川和美 場所：神戸文化ホール (地下鉄「大倉山」駅徒歩1分、JR「神戸」駅北出口徒歩10分) 主催：9条の心ネットワーク、電話078-361-9199 (兵庫県弁護士9条の会気付)

市民の意見30の会・東京 新事務局体制のお知らせ

事務局に助力求む！

新体制発足

「市民の意見」前号（127号）の「事務局だより」でもお知らせしたとおり、本会はこのたび、設立以来の代表者であった吉川勇一氏の申し出を受けて、新たに共同代表体制へ移行しました。また事務局メンバーの変動もあり、活動体制の見直しを進めています。

本会の隔月刊機関誌「市民の意見」は会員の熱心な支持を得て、市民運動としては異例の発行部数2千部を超え、会員数も毎年増加の一途を辿っています。しかし、裏方の実務体制の実情といえば、高齢化（事務局のみならず、ごめんなさい！）と人手の減少で弱体化が著しく、活動の存続さえ危ぶまれる綱渡り状態が続いています。このままでは機関誌の発行に加え、本会の最大の特徴であり財産でもある新聞紙上への意見広告掲載の歴史も途絶えかねない状況にあります。

へ平連の文化を伝えたい

「へ平連（ベトナムに平和を！市民連合）」という言葉を、いまの若い方々はご存知でしょうか。数えてみると、もう50年近く前の話にな

ってしまいました。わたしたち「市民の意見30の会・東京」は、何を隠そう！（笑）、「へ平連」の流れを受け継ぐ市民運動グループです。「へ平連」の名は時の流れとともにやがて世間から忘れられてしまう日が来るかも知れません。しかし、ぼくにはどうしても伝えていきたい「へ平連」の「文化遺産」があります。それは、提案者はそれを人に要求するのではなく自ら率先して実行するという「言い出しつべの原則」、あるいは「絶対ということ」は絶対に言わない」という多様な価値観と立場を尊重する気風、あるいは「事務局に顔を出している人が事務局員」という個々の主体性を重んじるオープンでフラットな組織論です。更に言えば「真実は多数決で決めるものではない」という少数派の矜持もぜひ挙げたいと思います。こうした「文化」をこの事務局を通じて、多数の読者の志ともども次世代に伝えていきたいと願っています。

こんな作業があります

事務局では毎月1回、原則的に金曜日の午後6時半から8時半まで、代々木駅徒歩5分の事務所です事務局会議を開いています。ここで会の活動に関する重要事項がワイワイと議論され、運営に関するすべてが決められます。これが最も本会らしい楽しい(?)時間です。

毎週土曜日の午後1時から5時までは共通の作業日として、さまざまな事務作業を、ある人は賑やかに、ある人は黙々と行います。

会員名簿や会費のPC入力、会計帳簿類への記入、会のホームページの更新、郵便物の整理、会員宛領収書の発行、会員や他団体への諸連絡や郵送、などなど。

隔月の金曜日午後6時半からは機関誌「市民の意見」の編集会議があります。市民の立場から伝えたいべき情報や訴えたいべきことをマスコミとは異なった立場で議論し、テーマや筆者を決めていきます。さらには発行のたびに、神経をすり減らすゲラの校正作業や、大勢が集まり一番市民運動らしい熱気で溢れる発送作業も行われます。

毎年5月3日の憲法記念日の新聞に意見広告を掲載してきましたが、継続がもたらすマンネリ化への懸念も出てきています。今後はタイムリーなテーマと時期を選び、プロジェクトとして実施してはどうかとの意見もあり、話し合いをすすめています。

こうした事務局の運営は、交通実費の支払を除いて原則としてすべて無償のボランティアで担われています。可能な時間だけの参加で構いません。自分の得意なあるいは興味ある分野のある方、あるいはなくてもこの際一肌脱ごうという快気(?)のある方、ぜひご参加下さい。その他不明な点は、メール、電話、FAXでご遠慮なくお問い合わせ下さい。

野澤信一（のざわ・しんいち、本会事務局長）

読者の声

★胸にせまる絵

東京都町田市 望月廉一
「市民の意見」126号の表紙絵を見て胸が迫りました。私も元少年飛行兵学校生徒。1年5カ月の軍隊生活を送りました。それで一首。「戦争は二度としないと誓った筈 陸海空軍何故に保持する」

★なつかし風情の表紙絵

東京都杉並区 福富節男
127号の表紙絵は、描かれている風情も大変なつかしく、そのことを一言投書したくなりました。この表紙絵の作者は私(92歳)より一歳年下で、若くして戦死されたようでした。いたましい限りです。

★心打つ表紙絵

東京都日野市 中川瑞代
無言館の絵には毎回、心うたれます。

★天皇制批判を掲げるために

愛知県名古屋市 伊藤幹彦
「市民の意見」拝受。
早速一読も、天野恵一氏の一文の前ではた

と止り、なんともいえない後味の悪さに襲われ、筆を執りました。

天皇制批判はあって当然、小生も天皇制が果たしてきた役割とその責任については執拗に追及すべきと思っている一人であります。

しかし、多くの人と同じく、そのことと現在実在している天皇さん美智子さんを全く同一とはとらえていません。

また「マサコ」という呼び捨ても、失敬以上になんとも薄汚いものでしかありません。こうした姿勢で「反天皇制」問題が拡がることは決してありえないことを、ほんの少しでも分かってほしいものです。

★孫たちの世代へ平和を

神奈川県大和市 若沢康江
入会受理してくださり有難うございます。おおくりくださいましたチラシで、意見30の設立の歴史を初めて知りました。賛同します。TPPに対するお考えは如何でしょうか。

長く生きていますと多くのことに遭遇します。その原因、結果は、すべてと云っていいほど、権力者の意のままです。許せません。

弱者の政治への転換を押し進める人が多数になりますよう、昔、軍国少女だった年齢80の私ですが、孫たちの世代が平和に生活できますよう私なりに努力したいものです。

(1931年6月20日生)

★友人が入会しました

北海道札幌市 武部和子
1944年1月18日生まれです。

友人二人に「市民の意見」を送りましたら、一人が早速入会してくれたようです。仲間が増えると心強い気がいたします。息の長い活動でありますように。

★マスコミに報道されない記事を

新潟県新潟市 五十嵐政晴
ジブチの海外基地建設をはじめ知った。一般に報道されないことを載せてください。(編集部注：126号「ジブチ自衛隊基地建設」参照)

★デザインを軽やかに

奈良県大和高田市 橋本みね子
今年の意見広告、掲載されていた意見にもありました。もう少し軽やかなデザインの方がよかったです。

★再び、大政翼賛会か

千葉県四街道市 金子泰夫
「大震災の復興」という名のもとに「一つの日本」「大連合」と戦前の大政翼賛政治が再び始まるうとしていることに本当に危惧しております。マスコミ(大新聞)の右傾化はひどすぎます。

★無責任は駄目だ

新潟県新潟市 石黒壽夫

原発は人災です。無責任政党・政治家は
追放しよう！

★人の危険に支えられた原発

愛知県名古屋市長 山口光子

126号巻頭詩「原発ジブシー逝く」に愕
然としました。そこで働くしか道のない人が
日々危険に身をさらし乍ら原子炉を支えてき
た現実。それを許してきた私たち。「基地も
原発もいらぬいどここにもー」を早く実現
させなければ。

★「市民の意見」を購読します

東京都葛飾区 政池節子

現在78歳で読むものが多いですが、一年間
「市民の意見」を購読したいです。

★基地・原発のない社会を

埼玉県さいたま市 風間昭彦

「基地も原発もいらぬ」社会の実現を望
みます。今の福島原発事故の早期の終結、そ
の前に正確な情報の提供を政府・東電に強く
訴えます。

★小田さん、高木さんのこと知りたい

東京都西東京市 古谷高子

小田さんや高木仁三郎さんのこと、いろいろ

ろとお聞きしたいと思ひ、会員になります。

★原発推進派に抗して

神奈川県横浜市 加瀬さつき

「昔おろし」のカゲで原発推進派の巻き返
しが進んでいます！今度こそ脱原発の実現を
と切に思います。

★人間の国を求めて

埼玉県さいたま市 渡辺泰子

小田実は怒った。阪神淡路大震災の時、「こ
れは人間の国のやることか」と。でも、今の
状況はもつとひどいと思う。怒りを政府にぶ
つけなくてはならない。

★沖縄戦の悲惨を刻み込んで

千葉県松戸市 遠藤 勲

5月3日の憲法記念日に松戸市勤労会館に
出向き、元沖縄県知事大田昌秀氏の講演を確
かり伺い、往時の沖縄戦の悲惨な状況と米軍
基地への県民感情を脳裏に刻んで参りました。

★差別のない被災者への救援を

神奈川県横浜市 前畑ゆかり、章子、京子

3月11日の東北大地震は日本のどこにでも
起こりうる災害であるだけに、被災者の方が
気の毒ですすぐ救援募金を振り込みました。被
災者にすこしだけでも心で寄り添いたかった
のです。ところが、生活保護の受給者には届

いていない、配っていないとのこと、苦しい
悲しい恐ろしいという経験はみな同じです。
この差別は絶対にダメです。

★市民運動の場が盛り上がっている

神奈川県川崎市 椎野和枝

5月19日と光大緊急ティーチン「震災・
脱原発を考える」で山口幸夫、ロバート・リ
ケットさんが市民とともに語り盛会でした。
同日夜、「福島みずほと市民の政治スクール」
では元宜野湾市長・伊波洋一さんの話に会場
から質問の手が多く上がりこちらも会議室は
満席でした。

★バルーンヘカンパ

東京都豊島区 磯谷佳世子

バルーンのみもーセンチにでもなりますよ
うにとカンパいたします。「ノグチケラ滅ば
す人は滅んでねー」「基地いらぬー原発いら
ぬー子へ笑顔ー」

(編集部注：ノグチケラとは、国の特別天然記念
物。沖縄本島北部の山林「ヤンバルの森」にだけ生
息するキツツキの一種)

★9条・25条の実現を

千葉県八千代市 神代法子

憲法9条、25条を政府に守らせ、実現させ
ましよう。原発は廃止し、東電福島事故に
よる汚染は万年単位で続くことを政府に認め

させよう。

★救援と意見広告への協力を心がけて

静岡県静岡市 鈴木孝子

国難とも言える今回の大震災。いち早く郵便局から日赤本社へ義援金をお願いしました。静岡退職教員すえひろ会として、また、個人としても意見広告賛同金および義援金を、私が静岡平和資料館会員有志として義援金を被災の方々にせめてもの協力を、心がけています。

★逆風にめげずに

東京都品川区 羽生道朝

逆風にめげず、がんばっていきましょう

★原発に反対しつづけていたのに

京都府京田辺市 藤田晴子

いつもお世話になり有難うございます。被災者の方々が一日も早く「平常に」もどれることが出来る様、祈っています。原発には反対しつづけたのにとうとうという感じがします。早い収束を願っています。

★小田さんの死と政治の悪化

長野県伊那市 平澤克久

小田さんが亡くなってもう4年になるので、NHK特集は最初のものも見ましたが、

記録媒体がないので頭の中のみ入っています。再放送はうれしい限りですが、政治はどうしようもないですね。今年定年で就活中です。今後も送付願います。

★気持はいつも若く

愛知県名古屋市長 山田茂里夫

まだ、83歳。まだまだ若いつもりでいても、気ばかりで、頭も身体もなかなか言うことを聞いてくれません。皆さんの頑張りに頭を下げるばかりです。

★最小限の協力です

東京都国分寺市 升味久子

昨年、夫が旅立ち、ますます手もと不如意になりました。最小限の協力しかできず申し訳ありません。そろそろ引退を考えています。1929年(昭4)生まれで82歳になりました。

★3・11以降、何も手に付かず

宮城県仙台市 宮崎雄雄

「5月3日意見広告」、河北新報で拝見しました。今年は協力できず申し訳なく思っています。3・11の関係もありますが、1カ月は何も手につきませんでした。

★戦中派です

北海道札幌市 匿名希望

毎号の大変重い編集を感謝して拝読させて頂いております。私はアジア太平洋戦争開戦の年に女学校入学、敗戦の年に卒業させられました。戦中派ですが、82歳余の今日まで何のお役にも立たず申し訳ございません。
(1928年10月12日生)

★隠へい体質の企業

東京都西東京市 粕谷 努

東日本大震災にて日本中が混乱しています。原発事故での東京電力の対応の悪さは企業の隠蔽体質がはつきりと現れています。

★再考の時期の意見広告

東京都東村山市 市村志郎

大新聞への広告は再考すべきときではないでしょうか。



「読者のおたより」の多くは、会費納入の際の郵便振替票に書かれているメッセージを使わせていただいています。掲載について匿名をご希望の方は、その旨明記していただくと幸いです。

事務局だより

高橋 武智

■野澤信一・新事務局長（31ページ参照）の登場以来、事務局の運営ひとつとっても、活発で機能的になった印象があります。「そんなに機能的でなくてもいいのに」という声が出るほどです。二つの側面を両立していくところに、市民運動の知恵が発揮されるべきだと思います。

■北原博子さんが報告した9・11「経産省を人間の鎖で囲む行動」（22ページ参照）につき、9・19「さようなら原発1000万人行動」の東京集会にも、多くの事務局員・会員が参加しました。脱原発の動きも今や、正念場を迎えている感があります。

■この二カ月間の会員（＝定期購読者）の動きですが、新規会員数・94名、退会者数・8名、8月末の会員数合計は2188名と、順調な増加を示しています。この小さなメディアに寄せられる期待の大きさに、質の向上をもつて応えたいものです。

■インターネットからの報告——この二、三号、国際記事がとりあげられていませんので、それを補う意味で、中東問題に触れさせてもらいます。この冬、チュニジア、エジプトで噴出した民衆の動きは「アラブの春」と呼ばれ、中東と北アフリカ各地に拡大しまし

た。これを上から目線で「民主化」と呼ぶのは、ブッシュ流の欧米中心主義的な史観によるもので、むしろ、今までなかった新しいタイプの「民主化運動」と呼んだ方がいいでしょう。それぞれの国が特殊事情をかかえていて、一概には論じられませんが、ここのところ、世襲大統領二代目のシリアと、とりわけカダフィ大佐のリビアに関心が集中しています。フランスはじめ、NATO諸国軍は「人道的介入」の名のもと、リビアを攻撃しましたが、これまた古いタイプの砲艦外交ではないでしょうか。なぜこういうことが繰り返されるのでしょうか。この点、9月3日、「ニューヨーク・タイムズ」に載った風刺画ほど、雄弁なものはありませんでした。リビアと書いたおもしろいようなキーキから自分の分を切り分けようと、米系・英系・イタリア系の大手石油企業が舌なめずりしている図です。

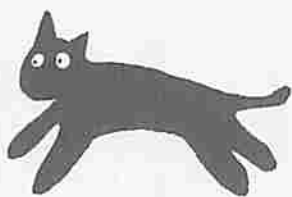
■この夏、オスロで起こった極右テロは、「民主化」とも関連するイスラム勢力の伸張に過剰反応した予防的な無差別テロでした。これに対し、イギリス、スペインなどの「怒れる若者たち」の経済格差や社会的不正への激しい抗議は、むしろ中東での「民主化」運動に呼応した動きととらえられましょう。その中東へもどれば、若者による散発的な良心的兵役拒否など以外に、大きな社会運動が見られなかったイスラエル各地で、数十万人規模の異議申し立てデモが、ここ一月あまりつづいていることは画期的な出来事で、今や新たな

「民主化」の動きは中東一帯を席卷しているといっても過言ではないでしょう。

■9・19の1000万人アクションに加わりました。6万人をこえる参加者で、圧倒的な盛り上がりでした。60年代末、ベトナム戦争反対で万をこえるデモに加わった記憶があります。（60年安保闘争）時には10万規模のデモもありました。）

■しかし、現在進行形の反原発の行動では、世代をこえた参加者の幅広さと、色とりどりの名称をもつ自立した市民団体の数の多さに胸を打たれます。

（たかはし・たけとも、本会事務局）



編集後記

●あのフクシマ原発事故直後の緊迫した状況下で、東電はとんでもないと批判したひとつにむかって、「それは正論だけれども、今はそんなことを言うべきではない。正論を言っていればよいものではない」と怒ったように言うひと、「そう、私も正論だけで解決するのはかぎらないと思う」とその意見に同調するひと。そんなひとがいまいませんか？

●でもその正論がないがしろにされてきた結果が今回の原発人災事故だ。ことここにいってもなお「正論」に自然とうなずけないのは一体、なぜなのでしょう。

●そして、「みんなで」がんばろう！そのためには余計な言葉は慎もう——というのはおかしいと思うのを通り越えて恐ろしさを感じ

た。その「余計な言葉」とは一体、だれが決めるの？そんなのわかるでしょ。それをわからないのが、空気を「読めないひと」なのだそう。活発に自分の信念で行動する若者たちの一方で、そんな若者たちもいる。(甫)

●編集委員 天野恵一、阿部めぐみ、有馬保彦、杉内蘭子、高橋武智、高岡甫雅(本号担当)、西田和子、野澤信一(次号担当)、道場親信、本野義雄、諸橋泰樹、吉川勇一、吉田和雄

会計報告

9・11「経産省を人間の鎖で囲もう！」に本会からは92歳(たぶん最高齢参加者?)の福富さんも参加されました。当日、福富さんを探そうと経産省の周りを歩き始めると、行けども行けども人・人・人で埋め尽くされ、最後の角を曲がった時には喜びと感動で思わ

ず「繋がってるっ！」と叫んでいました。福富さんも無事到着。また、何人かの会員さんからも「30の会はこの旗ですね」と声をかけていただき、老いも若きもみんなが繋がった「脱原発！」。

さて、今期も支出が多かったにも関わらず黒字で繰り越せました。これは前期同様会員増が続く、前年同期と比較しても収入が倍近くとなったおかげです。

今期の支出面では、事務局体制の変更などに伴い意見広告との分担金の見直しがあり、事務所家賃、光熱費等を30の会で当分全額負担することになりました。また、会計より会員の皆さまへのお願いです。本会では便宜上「市民の意見」に毎号「振替用紙」を挿入させて頂いておりますが「会費の前納」は2年間を限度とし、これを超える会費は「カンパ扱い」とさせて頂きます。どうぞご理解ください。(上口)

市民の意見 30の会・東京 2011年7月～8月会計

| 1. 収入 | |
|----------|-----------|
| 一般会費 | 406,500 |
| 協力会費 | 150,000 |
| 敬老会費 | 370,500 |
| 障害者会費 | 11,500 |
| (会費小計) | 938,500 |
| カンパ | 221,100 |
| ニュース販売 | 5,600 |
| バッジ等販売 | 7,300 |
| 銀行利息(*1) | 237 |
| 預り金 | 364,500 |
| 立替金精算 | 160,193 |
| 収入計 | 1,697,430 |
| 2. 支出 | |
| 印刷費 | 234,354 |
| 発送費 | 150,340 |
| 通信費(*2) | 118,670 |
| 消耗品費(*3) | 111,732 |
| 編集費 | 38,860 |
| 交通費(*4) | 52,380 |
| 事務所費(*5) | 220,000 |
| 光熱費 | 14,921 |
| 手数料 | 61,575 |
| 諸会費(*6) | 75,570 |
| 雑費 | 5,453 |
| 預り金精算 | 311,580 |
| 立替金(*7) | 157,530 |
| 支出計 | 1,552,965 |
| 3. 収支 | |
| 前期からの繰越 | 7,965,513 |
| 次期への繰越 | 8,109,978 |
| 4. 残高の内訳 | |
| 会基本会計 | 6,369,242 |
| 条約基金 | 176,715 |
| F/I基金 | 1,165,820 |
| 預り金 | 398,201 |
| 計 | 8,109,978 |

(単位:円)

注(*1) みずほ銀行普通預金利息。
(*2) 「9・11アクション」ご案内はがき1,200枚¥60,000他(*3) A4角封筒¥94,324、プリンタートナー、コピー用紙他。(*4) スタッフ交通費補助6～7月分¥47,490および編集用務交通費。(*5) 家賃8、9月分。
(*6) 「小田実さんを偲ぶ会」分担金¥30,000、「9・11アクション」風船提供諸費用¥45,570。(*7) 交通費補助意見広告6月分¥12,430、「バルーン大作戦」活動費¥145,100。